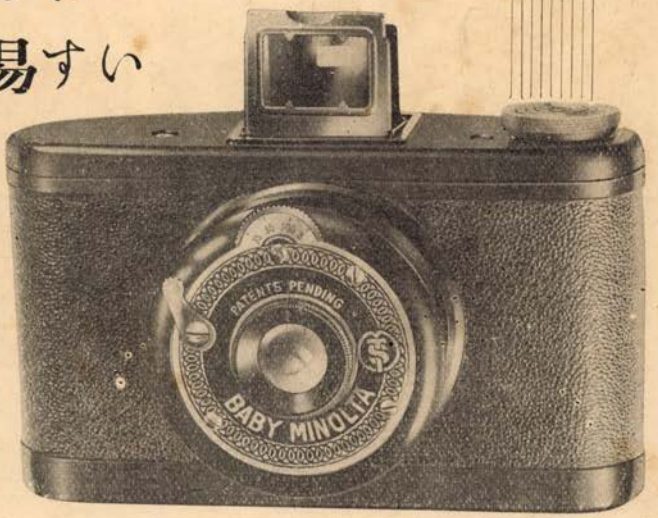
川柳雑誌

麻生路郎★編輯

NO.XII VOL.XIII

手輕るに
寫し易すい

ベビー
ミノルタ



¥ 9.50

ヴエスト判
3 × 4cm判 兼用

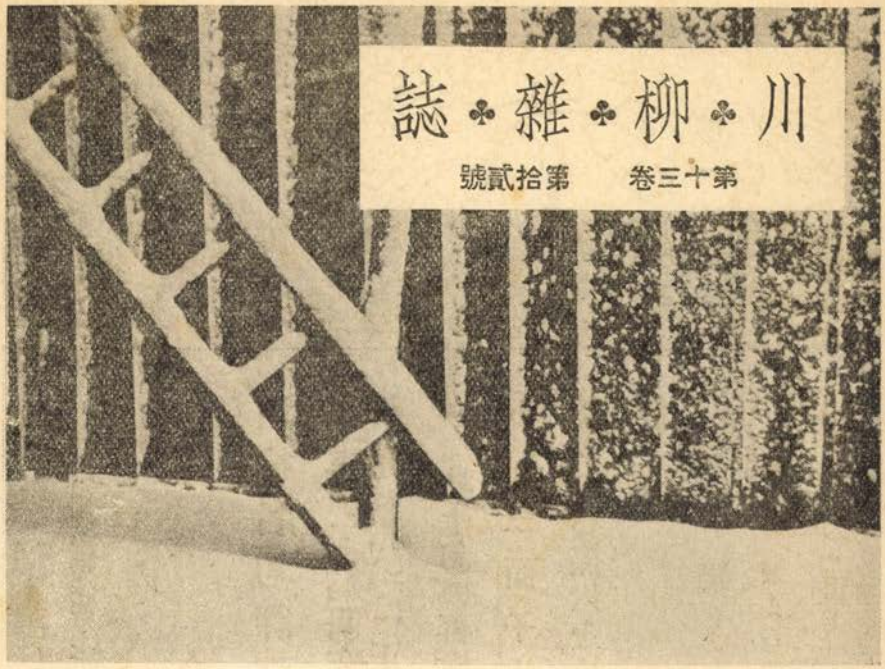
速寫ケース ¥ 2.00

カタログ進呈

全國寫眞機店
百貨店にて販賣

浅沼商會

東京市日本橋區室町
大阪市南區順慶町



不朽洞句稿

麻生路郎

雪空で新手の詐欺にかかつて來
勅題は何んでしたかなと十二月
橙を千切つた梯子景になり
ついそこに居ますとばかり十二月
父のずぼらがいつそ目立つも十二月

川柳雜誌 十二月號目次

題字・路郎筆

文苑

川柳名句評釋……麻生路郎…(四)

武玉川二篇研究の研究並びに正誤……武玉川二篇追究…竹重虛心…(一一)
武玉川研究落穗…綿谷摩耶火…(一七)
武玉川二篇研究正誤…森東魚…(一八)

六厘坊十句の再檢討(四)……木村半文錢…(二九)

あゝ三面子……麻生路郎…(二六)

錦涙・谷孫六を悼む……麻生路郎…(三一)

髭入門……不死鳥…(三一)

いろは祭……たかを・あきを…(三三)

川柳書架…(六二)……(三九)

川・協・の・頁……(三五)

三越で拾ふ……R……(三六)
川・柳・横・町……不死鳥……(三三)

創作

不朽洞句稿……麻生路郎……(一)
川柳塔……麻生路郎選……(三〇)
近作柳樽……麻生路郎選……(二九)
日本名所名物川柳(四國の巻)……前田五健選並書……(二三)
一路集……竹西田艸樂選……(二四)
各地柳壇……(四一)
柳界展望……(三七)
柳誌要目……(三七)
川・雜・案・内……(五二)
川柳家戸籍調……絲雨……(二〇)
社關係の人々……(五一)
編輯縱横……路耶……(四九)

川柳名句評釋（5）

麻生路郎

女房を毆ると猫も居なくなり　九史

殺すなら殺ろせ、化けて出てやるから——と女房の鼻いきも荒い。イヒヒ……とヒステリカルな悲鳴。

猫だつてジツと見てゐられないぢやないか。ノソ〳〵と腰をあげていつのまにか姿を消したのである。物凄いほど冷やかな觀察ではある。

何もかも斷る顏のブルドツグ　紫郎

顏の批評なんか卑しい人間のするこつだ。わしの世界にはそんなものはひとりも居ないぞと、この句を讀んだブルは憤慨するに違いない。人間よ、モ少し謙讓なれ。

大旦那一人へ暮の風呂が沸き　錦魚

風呂は沸いたが這入つたのは大旦那一人だ。大旦那一人のために風呂が沸いたやうなものだといふ觀察。これだけの表現で忙しい暮の情景が浮き出てゐる。

怨念を質屋かまはず藏に入れ　亂三

一篇の小說だ。ソロバン以外にない質屋の性格を無造作に、しかも深酷に詠んだところが手柄である。

貧しさは時に罪なき子を叱り　鉢朗

生活戰線で憂鬱はつゞく。罪のない子を叱つて僅に、鬱憤を晴らす。可哀相なのはその子でなくて寧ろ其の父や母である。

人口の過剰の中に俺も居り　青龍刀

人口の過剰は今、世界的大問題となつて登場してゐる。淘汰されてもいゝ自分か否かを意識するところに存在の意義は充分だと云へよう。俺だ俺だ。

泣きながら女女の道を行く　清流

女三界に家なしと古い教は說く。が、近ごろの女は必ずしもそうではない。

食客女房の方に恩はなし　鞍馬

女の居候なら、箒の一つも持つし、茶碗の一つも洗うが男の方は何一つ手傳つては呉れないし、イヤになつちまうとヅケ〳〵云はれたことが、曾て居候をした男の頭の隅つこで閃めく。この句の摑み方も面白い。

子の寢言買つてやらない事を悔ひ　水華

買つて買へない事もなかつたが、辛抱が出來れば辛抱させた方が身のためだと思つて買つてやらなかつた。ところが寢言にまで出たので、それ位欲しいものなら買つてやればよかつたと今更後悔するのも親心ではある。

長襦袢女は風邪をひかぬもの　艸樂

艶姿そのものゝ長襦袢の儘女は鏡臺に向ふ。そして相當な時間を消費して顏の造作が行はれるが不所議と風邪一つひかない。作者の烱眼がこの句を生む。

ボーナスへ借りてる金を寄せてみる　港太郎

たんまりでもないが兎に角、ボーナスを貰つた。なんだか身うちがゾク〳〵する。併し平素足らぬ勝ちの生活をしてゐるので、いつの間にやら、あちこちに借金が出來てゐる。ソレをソーと算盤に入れて見る。ボーナスをみな投げ出しても足りない。思はず、ああーと深い溜息を洩らしたサラリーマン氣質が遺憾なく描出されてゐる。

物賣は障子もあけず斷られ　山月

「ゴメン下さい」と云ふ聲が物賣りの聲だと、まだ何も云つてゐないうちから「妾のうちでは澤山ありますから要りせんよ」と、もう斷る聲が障子の向うからして來る。

金ですむ事を金持告訴され　語翁

大抵のことは金で濟む——と金持は思つてゐる。結婚を解消しても貞操を蹂躙しても、人を轢き殺しても慰藉料さへ出せば、それで萬事がキャンセルせられるものだと心得てゐる。が併しなか〳〵その金を出さうとしないのが金持心理だ。

麻生路郎選

その氣持 買つて 汽車賃 だけ 殘し　大阪市　西田 艸樂

縄飛びの 乳房 ふるふを 感ぜず や　同

取 次 の 女も 少し 妬く 電 話　同

赤ネクタイ媚びを賣られた責めがあり　同

ヤマ 三圓 高を くゝつた 段 梯 子　同

いつからの酒か酒を戀ふにはあらねども　島根縣　尼 絲之助

人の世に なれて自嘲は こみ上ぐる　同

阿呆らしい世と思ふラヂオ勝手なことを言ふ　同

よう喰つてゆくとは人のことならず　同

葱 すい〳〵 追はれた蝗 ゐる　同

ゲルベラの 花びらは 針よ胸を刺す　大阪市　麻生 葭乃

揚 花火 散つた 姿 の 蔓 珠 沙 華　同

秋ざくら あまりに 堅き ペン 皿 や　同

ダリヤぬかれ いよ〳〵 白き壺と壁　同

女給の父 案山子となつて 夢に入り　豐中市　阿部 閑生
驛辨を 呼んで 餞別 封切られ　同
ブレーキの 利かぬ 男が 幹事 なり　同
猫思へらくヘツついのない家ばかり　同
朝々 がうれしく 葱が 浮ぶ 汁　大阪市　橋本 綠雨
收穫の 時雨に 濡れる こともよし　同

大山國立公園

大山の 紅葉に 一人 殘される　同

三朝溫泉

一人來て 曇る 三朝の 湯に ひたり　同
不機嫌な 父に 觸れまい 箸を とる　松本市　石曾根民郎
人の死に 逢ひて 歩みも ゆるやかに　同
孫抱いて ほのぼの 冬の身をたもつ　同
新聞紙 父は 怒りを 伏せて 寢た　同
長い 床 小さい 孫に 好かれ たり　兵庫縣　戸倉 晋天
懸崖を 貰つて 玄關せま すぎる　同
壁一重 となりの 部屋の 老けた聲　同
椽續きとなりも 椅子を 持ち出して　同
子の 足が 頭へ 來なく なつて 秋　大阪市　加藤ライト
二切れと 云ふ 松茸 のうすいこと　同
サービスにしては手ひどいなぐりぐう　同
喀血を 秘し 看護の 手が ふるひ　同
世の 中を 盲 計りにして 遊び　大阪府　米本貴志子
人間の 弱さ 邪教を 育て 上げ　同
師の 葬儀 叱られも せず よく並び　同
デパートの夫婦落ち合ふとこをきめ　同
コンクリートばかりを踏んでゐる生活　東京　福田山雨樓

岡田三面子博士を偲ぶ

聞けば 聞くほどに 人間 三面子　同

矢野錦濕氏を偲ぶ

孫六の 名で 日本を 儲けさせ　同
癈兵の 一本足も ハネをあげ　柳大門
假縫の 背中は 妻が 承認し　同
煎餅を 一枚 食べた 母の會　同

年頃の客が目に付くバスガール　名古屋市　稲垣　正穫
日本人科料とられて改める　同
よい事の朝から續く貰ひ物　同
大阪の街に似てゐる花電車　大阪府　宮内　白峰
踊子は足がつめたいなと笑ひ　同
謹みて君はラヂオに病んでゐる　同
幹事又動き銚子が運ばれる　神戸市　西村　明珠
落ちさうにバスは名所をかけめぐる　同
たくらんでゐる心臓が亂調子　同
銅貨にもくづし墓口らしくなり　大阪市　西　いわを
慶應と早稲田家内中ラヂオ　同

九州旅行

岸壁の水はテープの色に映え　同
我儘のここまで届く背がほしい　小倉市　伊東　千龍
土砂降へほんに家賃の有難味　同
淺間しい姿にしたりレントゲン　同
副業に助けられてる十二月　大阪市　市塚沒食子

留守勝ちの夫を持つて犬を飼ひ　同
癒つてもまだ盃をもてぬ秋　同
祭もう明日で提灯屋の襷　神戸市　喜多　春秋
百姓の娘で街の夜の女王　同
女ですものと女のそれでよし　同
義理人情その上嘘にとり卷かれ　神戸市　岡田　某人
妾の死銀のちろりは何處へ行く　同
蠅よろ〳〵冬の陽射しへ掃き出され　同
言ひ足りぬ心は雨の中を追ひ　大阪市　原田　一風
生血吸ふ女と見えぬ素顏で來　同
押す方も理窟があつた滿員車　同
口答へ凄い目つきを母に向け　兵庫縣　長崎　柳秀
働かぬ指を女給は賞めて呉れ　同
やつれゆく姿へ博士眼をそらし　同
深入りをしてはと主任嫉いて居る　大阪市　宮内　廣々
問題の夫人に遠慮ない雜誌　同
はね上げて金の工面に行く姿　同

利子で 喰ふ 不安の 塀を 高うして　今市　長野　文庫

朝の客 その日の 賽の やうに 見え　同

繼いだのは 氣質 ばつかり 四男 坊　同

私娼 街 そとから 白い 足袋が見え　大阪市　須崎　豆秋

交叉點越して ヤレ〳〵 ぞつとした　同

お 辨當 開く に 岩へ 匐ひ 上り　同

父の 癖に 似た 子の 癖を 叱るなり　今治市　武田　紫陽

御主人の 留守を 奥樣 よく 話し　同

再 會を 約したまゝで 一 昔　大阪市　中井シナ子

公園の ベンチ お二人 よく 似合ひ　同

嗚呼 といふ 活字で 人の 代 終り　石川縣　勝山しとし

壇 風 城 址

田になつてしまふて 史蹟 保存なり　同

理解して もらつて ほしいビルの戀　京都市　永井　占山

レヂス ターガール 鏡を 前に おき　同

歸阪して 四五日 故郷 の 訛 あり　大阪市　庄司淡路坊

信 號 の 青に 動けぬ オート バイ　同

青筋を 立てゝ 正義に 居る つもり　今治市　矢野蛇の麿

何はさて 置き 女將にも 金が 要り　同

信心に 來て 下足 順 うばひ 合ひ　島根縣　原　獨仙

妓はんの 義俠に 泣いて 身繕ひ　同

名所 繪へ 行つた 氣持 の 老 夫婦　名古屋市　西村　上上

實印 にまでも 運勢 附き 纏ひ　同

ごまかしの 利くは女房とたかくゝり　今治市　石田美須賀

待たされる 電話へ ラヂオ聞えてる　同

世間から 忘れられ 中風 長らへる　八幡市　上野十七八

本當 の 味まで 待 てぬ 吊し 柿　同

ルンペンに 劣る 姿で 燒け 出され　廣島縣黑本十七夜月

愛情にめぐまれずして 世をすねる　同

心 覺 え も 筆 で 書く 母　大阪市　山本　葉光

七 人の 敵が 樂しい 獨り 者　同

青白き月賦の 群のラツシユアワー　兵庫縣　林　朔風

ビルの 窓 朝の 思 想 に 泳ぐ 雲　同

善人 の 不滿 無口 になる ばかり　東京市　村野蒼梧樓

家中が叱られてゐるさがし物　同

親しみがありいつまでも平巡査　今治市　月原　宵明

境界を無視してたわゝなる柘榴　同

無性髭それも易者としての髭　大阪市　坂本遠見路

似かようた暮し外燈の並ぶ辻　同

恩に着てそれとはなしに隱れてゐ　大阪府　朝田　新水

機嫌どり女ならねば夜の明けぬとこ　同

眠る段取りへ水藥粉藥　長野縣　高峰　柳兒

姐さんの面目としてちと惚氣　同

痩せた兒を抱いた乳屋につけこまれ　大阪市　小西　落丁

汽車賃を出しては合はぬ貸をもち　同

出張の忙しさ故郷を素通りし　京都市　明石　柳次

自動車の這入れぬ街で子澤山　同

ある時は水のこゝろにならんとし　尼崎市　川村　觀月

信仰の眼にあはれなる人々よ　同

絶景へ足なげ出して喰ふむすび　神戸市　山田　凡樂

洋食のメニュー子供の讀める文字　同

增燭をして松茸の店となり　金澤市　森田　白舍

痰壺の白きが淋し秋の驛　同

ベラ〳〵と妻のお客は着る話　愛媛縣　門田　雨城

頭かく癖もあはれや平社員　同

分讓地先づざつとした家が建ち　金井　串郎

痺れてる足座蒲團が知つてゐる　同

自由の天地公園の隅へ行く　今治市　石手　河鹿

寫眞代半分の友と肩を組む　同

モーニング今年は三日着たばかり　大阪市　奥野　其奥

夕燒の丘にすゝきの風とゐる　神戸市　山本　滲一

本家から借りると決めた膳と碗　大阪市　坂　澄風

父逝きて

アルバムへ父の達者な頃を見る　神戸市　難波陽出男

警官に送られて來る不心得　廣島縣　黑本　芳泉

半纏着喧嘩のしたい歩きやう　大阪市　辻　いの助

颱風一過まあ良かつたと飲んでゐる　島根縣　松浦　一鴻

編針の今年は五つ目をふやし　兵庫縣　酒井美知夫

うごけない 蛙よ 士をかけてやろ　島根縣 加納 素女
重い 荷へ 鞭 打ち 兼ねて 秋の 影　神戸市 渡邊 木履
冬近く 希望も 空し 爪を 切る　美山縣 原 美靜流
起重機 の 音建設 の 都市 があけ　滿洲國 高杉無智庵
ネクタイも 替へず 菊咲く 秋へ 出る　尼崎市 山田南濃路
お別れの テープ を五厘 安く 買ひ　愛媛縣 近藤何毛子
釣堀 の 一 人前へ 仕 切して　大阪市 正本 水客
毒舌は 斬られても みん 腰を 裾え　愛媛縣 鷲野 榮
運動會 二つ も 汽車 の 窓に 見る　今治市 富永 里子
紋付の 上の 國防 婦 人 服　大阪市 濱口 七歩
先輩も 同じ なまりで 會ふてくれ　大阪府 大阪 形水
電燈 の 夏を 過ぎたる 蠅 の 糞　石川縣 高木鈴の家
農繁 期夜 星朝 星 戴 い て　奈良縣 嶋田 翠峰
叱られた 小僧へ 客の 瞳が やさし　長野縣 中村 猪郎
ありつたけ 底をはたいて 煙草買ひ　神戸市 山本 砂丘
電話では云へず會うてはなほ云へず　大阪市 北川 睦男
眼鏡越し 理想の 高い 目が あつた　神戸市 藤井 徒歩
チツプはづんでオーヴアの襟を立て　尼崎市 坂井 胤盈

一里塚 一 里 の 疲れ 振り 返り　桜山市 酒井 大樓
鐘紡 の 敷地へ 汽車 の 窓が 開き　岡谷市 林 幹
戰 死 し て 上 等 兵 に なれぬ 父　今治市 菊池 香力
大安 の 朝 に 届いた ラブレター　島根縣 勝部 海棠
急く 前に 娘がゐる 寫眞 動いてる　朝鮮 弘津骨人坊
一 角 が 破 れ て 雲 の 皆 動 き　山口縣 三原 狂路
獨身 を 通 し て 友 の 嫁 を ほ め　名古屋 星野 兄兄
明日の日を 信じて 菜つ葉服をぬぎ　尼崎市 酒井 斗風
國 訛り 笑はれ ながら 都會 馴れ　島根縣 山本 勇吉
老人の 未練澤庵漬を 噛み　兵庫縣 田邊 由布
釣竿へ 聲が 大きい 池 の 面　奈良縣 奥田 葉魚
薄情 を 數 へ る やうに 雨を 見 る　今治市 石崎 柳石
客 去つて 何時か 西日の 窓となり　大阪市 馬淵 龍城
過 去 の 父 で なし 猫 を だ き　石川縣 島田 涙笑
對座 し て 妹 だまつてゐる ばかり　島根縣 川柳亭凡愚
退 院 の 間 ぎ は 廻 診 笑 ひ 顏　大阪市 山口 木守
寒月 へ 銅 像 肩 に 意地 が あり　松江市 畑塚柳大佐
緣談へ ピアノ 續けて 彈いてゐる　神戸市 坂上 啓坊

武玉川二篇研究の研究並びに正誤

古川柳研究の權威梅本秋の屋、森東魚、蛭子省二、三先生の不斷の御努力になる「武玉川二篇研究」が前號で終結した。本號では二篇研究に關し竹重虛心氏の「武玉川二篇追究」綿谷醪耶火氏の「武玉川研究落穗」並びに森東魚氏の「武玉川二篇正誤」を掲げて二篇研究の補遺とした。

武玉川二篇追究

竹重虛心

(9) **四十から老曾の森へ飛んで** 行

此句柳樽七九26ウ及び八四9ウに出て居ります。素より剽窃されたものでせう。『四十雀鳥の身持も老ぐるし』武玉川七其他十句あまりありますが、皆雀（カラ）をよりの意に用ひたものばかりです。

【省二】 お說通りと思ふ。そういふ心持に於て解說に從つた。私が「問題にされた事もあつたが」と書いたのは、今は昔、故人柳雨翁から四十雀と老曾の森の關係有無のお尋ねを蒙つた。それは和歌事情からであつたと思ふ。翁は柳多留より拾ひ「川柳膝栗毛」の老曾の森の項に加えられた筈だ。老曾の森は年齡に關係して用ひられた。【東魚】四十を初老とする事から、四十雀を老曾の森に結びつけたのみであらう。老曾の森に就ては、俳諧名所集にも、鶯、時鳥、蟬などをあげてあるのみで、四十雀は見えないから單に言葉の上の取合せ丈けであらう。【秋の屋】「歌枕秋の寢覺」に、「おひその杜、老の述懷によせて多く讀り」とあ

る。

(25) やもめからすに張のない風

カゼでなくフウでせう。二編七四の「妾の智慧も河竹の風」と同一と思ひます。

【省二】フウと讀めば、句意は其儘判る。然しカゼと讀むで意味がとれるのみか、深刻さがわく。斷然一句立のものとしたなら、カゼの方を採る。私はカゼ説だ。【東魚】私も矢張カゼとよみ度い。句の調子も其方が良く、又フウだと單に説明的になつて、含蓄が乏しいやうに思ふ。【秋の屋】フウと音讀するも宜いが、フリと訓みたいと思ふ。

(29) うまい事言ふた師走に助ケ舟

助ケ舟は暮の持參嫁ではありますまいか、五、七の解は東魚氏に贊成します。

【省二】お説なれば川柳手法に適合。嫁だから舟だなどと考へ落をせずに。然し前句に因て確定すると思ふ。因に久流美君の女房説（七月號掲載）ああいふ風な解し方には不贊成。【東魚】助ケ舟を求めると云ふ心地かもしれぬ。求めるとの意味合を、前句の響から首肯させた句かも知れない。【秋の屋】助舟はどうにも解釋されるが「うまい事いうた」が少し解し難い。

(44) 鳥屋の前ておりる遠乘

屋は居の誤植か誤字ではありませんか、鳥居だとすれば鎌倉の八幡宮で平易な句となります。

【東魚】原本は鳥屋である。【省二】讀者諸氏へ幸序にお詫致度きは、半狂堂本の誤字をも訂正する樣努めて來たのに、誌上に於ては、かなり誤植がある。校正係へ特に句文け御留意を願ふ樣御依賴は致してある。いづれ一括して正誤表を載せたい。

(51) あふひの上の袖に護摩の香

源氏物語中葵の上の句は非常に多數あります。そして其多くは車爭ひが材料になつて居るやうです。此句のやうな場合は割合少くて私もうれしく思つてゐます。一二例句を

あふひの上の床につむ蘿　種卸二六
あふひの上の蜘がいきれる　ケイ二一
御うらみももう歸依僧の御いのり　樽九四

【省二】同感。

(55) かんこ鳥江戸の暑さはしらぬ也

此句襄に私は川柳三鳥傳で擧げましたが、以來疑問を挿んで居る句なのです。かんこどりとよぶものに、閑子鳥、諫皷鳥、寒苦鳥の三種ありまして「文字がちがふと賑やかな諫皷鳥」（しげり柳上）とある通り、山王祭神田祭等に出る諫皷鳥は閑寂、な閑子鳥とちがひます「夏山と秋の田で出る

かんこどり」（樽三二）此句から考へると、暑い六月の山王祭に出る諫鼓鳥は、暑さを知つて居る譯だが、本物の閑子鳥は知らぬといふ意味にも考へられます。又寒苦鳥は、「雪山有鳥堀穴夜入穴此鳥裸無毛毛吉勝諸鳥故名寒苦鳥」「夏月羽毛盛冬月裸體晝夜鳴叫故曰寒號鳥」などある點から考へると寒苦鳥かとも思ふのです。「其鳥の啼止む內もかんこどり」（金砂子）の句も何れの例か不明であります。兎も角江戸の暑さは、山王祭を利かしたものと思ひますが如何でせう。

【省二】寒苦鳥ではない。閑古鳥である。蕪村に「閑古鳥は賢にして賤し寒苦鳥」と貧居八詠中にある。江戸と斷つたのが、お說の山王祭とすれば通ずる。そうかも知れぬ。然しそうでなく素直にとつても判るのではある。前句さへ知れれば、わけないのであるが。【東魚】夏祭の諫鼓鳥を一面に對照してゐるのであらう。【秋の屋】閑古鳥に相違ない。俳諧では夏の動物としてあるから、芭蕉の「閑古鳥われも寂しいが飛んでゆく」などの句に依つて、繁華な江戸市の暑氣を知らず、閑寂の山中に棲んでゐると云ふので山王祭を考へるに及ばぬ。

(63) 葬 にあつひきせるの打違

諸說に敢て不贊成であるのではありませんが、あつひが充分分りません。私は朝早く來た客（作り主でもよいが）が其大輪咲の朝顏を見て、吸ふて居る煙管を花の上へ置き、縱に横にイヤ八寸あるとか、六寸だとか直經を計つて居るやうに思ひます。吸付けるきせるでは、あついの意を半分しか利かず、又朝顏でなくてもよいやうに思ひます。大輪を誇る朝顏としては、私見をふさはしいかと思ふのです。

【省二】大輪の寸をはかるに、煙管は恰好。其場合あつひの適不適は考へようであらう。又打違もお說の意味はある言葉だ。然し私共の解說と何れが正當なりやは、直に判斷は出來ぬ。前句關係だ。武玉川の朦朧體に一興を覺ゆるところ、類詠を心掛けてみたい。【東魚】寸をとるとの解は面白いが、未充分に腑に落ちぬ感がある。【秋の屋】江戸時代の朝顏が屢々流行したが、當時は色彩の美麗なると、專門家の變化物と稱する、奇品が鑑賞されたもので、六寸咲七寸咲といふ、名古屋種關西種の大輪が鑑賞されるのは、明治末期からである。されば煙管で寸法をはかるやうな大輪は、江戸時代には無かつた。【省二】朝顏の珍奇種を愛賞した事は文化頃から流行したらしい。「異花奇葉の出來たりしは、文化丙寅の災後に、下谷邊空地の多くありけるに、植木屋朝顏を作りて種々異樣の花を咲かせたり」（江戸名所花曆）。「朝顏の種類色々出る事、文化の始よりの事なるべし」（飛鳥川）。甲子夜話には、「近くは牽牛花の變甚しふして花色のみならず形狀も變じて……一變して花の大輪

を賞すること流行出し、花の指渡し數寸に及ぶ」云々。斯る興趣の傾向は以前からきざしてゐたのであらうが、武玉川の句の解するにどうか。閑をみて今少し研究してみたい。

(86) **樣と云ふ名て來る時は忍ぶ艸**

なんとかいふ唄――は次ぎのではありませんか。三味線の習ひ初めによくやる「菜の葉」の中に上々樣の痴話文も別にちがはぬ樣まゐる。

(87) **神風に吹消れたるもみちの火**

例の住吉明神と白樂天との問答の故事をよんだもので、神風といつた用例は

神風でしめる間もなき雲の帶

神風で寺の言葉を吹きもどし

などあります。白樂天の詩に、林間暖酒焚紅葉、石上題詩拂綠苔がありますから、これを用ひて白氏を表し右の故事を詠んだものではありませんか。

【省二】 貴解によると珍しい句だ。衣や帶の句が多き中に――白樂天關係の句には「神風」といふたものが多い。

【東魚】 成程高說の如くであらう。【秋の屋】 私は前に詠史の句であらうと述べたが、再按するに、菅公の「此たびは幣もとりあへず手向山、紅葉の錦神のまに〳〵」といふ歌で名高い手向山神社の紅葉を詠んだ句と思ふ。亦、素性法師の「手向にはつゞりの袖もきるべきに、紅葉にあける神やかへさん」といふ歌もあつて菅公の歌と共に、『古今集』卷第九にある。仕丁が紅葉を燒いて酒を暖めるところは、繪畫によく描かれるが、淨瑠璃の所作にも有る。

(94) **ほとゝきす皆出來合の葉也けり**

省二兄のお說に大體贊成であります。他は何れもお考過ぎかと思はれます。辭典によりましても出來合は――既に出來て其場にあり合はすこと――などあります。出來合で甚だ失禮ですがなどと、親しい友達に御膳を薦めることは何れの家にもあります。此等の意味から考へて、新綠、新樹の事で、黃ばむもの綠のもの薄く濃く生々した――少し意味が變るかもしれぬが、出來たての新綠といふ意に解しては如何なものですか。

【東魚】 木の葉は元來が青いのが普通なのだから、紅葉したりした特別な葉ではない、出來合とも云ふべき青葉なのだと云ふだけの心持なのであらう。【秋の屋】 出來合と出來たてとは、多少其意が違ふ。新樹のこととすれば、出來たての方である。【省二】 竹重さんの御研究下さつた事に對し、三人が大體意見を陳べ得た事は、將來に亘つて尙研究を續ける上に、甚だ便宜であつたのを感謝したい。お氣附或は御不審の點は、直接私にまで御通報に接しなば、繰返し考慮檢討して、原意を探りたく思ふ。

(360)

笛の上手に身をすてる鹿　（武・初）

【省二】大阪のお方から、此句に關する私共の解に就て、

「笛のカミテと讀みたいのですが（調子の上からもさうだと思ひます）。笛のジョウヅだといふ人もあるのです。が鹿笛に上手下手の吹き方のあるかないかを、奈良に迄調べましたが、たしかに答へられる人がありません。上手下手がなければ當然、カミテとわかるのですが如何でせうか……」

との異說が報ぜられた。去四月に社へ回答を寄せたのに、未だに掲載されぬから、此機會を利用して末尾に一筆丈け添えさせて貰らひたい。此句は難解のものと思はず、至極簡易に陳べたので、笛だからこそ上手下手は當然あるべき筈。奈良の人が御承知ならぬ丈けの事で、古俳句

鹿笛の上手をつくす哀れさよ　樹水

でも、最早解決する。鹿笛の句は後篇中にも見受けるから其際詳述するとして、閑田次筆卷之四に

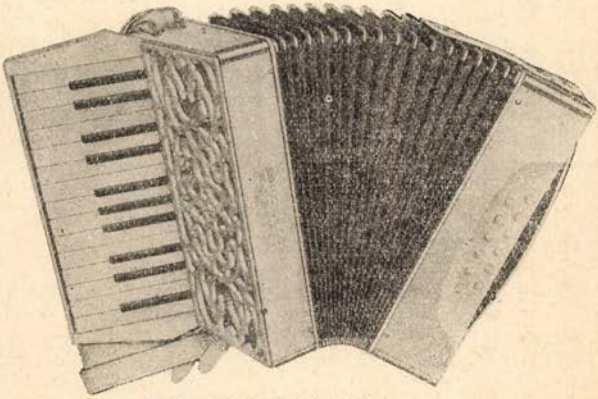
「淡海八幡に佃房といへる俳諧師、鹿笛をもてり、形凸如此し、……此幸助、此笛を吹こと上手にて、妻鹿の音をふけば、眞にせまりて寄來らざる鹿稀なり云々」

「調子の上からもカミテと讀むべきだと思ふといふのは、自解に執着すると、そんな氣がするもの、古句の解說に對する態度としては、白紙に返つては味誦する、樂しみの盡きぬものなのである。——（八月五日送稿）

ヤマハ
アコーデオン

10號…¥10.00
20號…¥17.00
30號…¥23.00
40號…¥28.00
50號…¥40.00
60號…¥60.00

カタログ送呈



60號　ピアノアコーデオン

山葉ピアノオルガン製造元
日本樂器會社大阪支店
大阪市・西區・四ツ橋南
電話新町一〇七三番

武玉川研究落穂

綿谷摩耶火

〔二編ノ一〕

二九—うまい事言ふた師走に助け舟

『師走に助け舟』とは、よくも云つたものだ適切だ……と簡單に、二句々割れの倒絶として解すべきだと思ふ。

○

八八—吾妻くだりの青いからかさ

在五中將の繪に作爲した事は明らかであるが、特に「青いからかさ」と云ひし點は注意を要する。當時、青紙日傘は大變な流行であつて、一時幕府の禁令が出た位であつた此の青紙日傘は京都の舞の太夫おゑん、おもんの兩女が流行らせて江戸に及んだといふ俗說が流布しており、此の事は諸種の隨筆にも見ゆるが、白彥の合卷にも是を扱つた作品があつた筈だ。

○

一〇三—情しらずの笑ひ大きし

情事などに見向かうともしない者であるが寧ろ女の場合を、特に想像したいし、又、女の場合に多く「情知らず」の語を用ひる。西鶴は五人女中のおせんを情知らずと表現してゐる。從つて、男の豪傑笑ひでなく、ハニカミを知らぬ明け放しな娘の甲高ひ笑ひ聲を捉へた句であらう。

○

一六七—書置に引くらべたりあづさ弓

輪講各位は、自殺者の遺書と一致したやうであるが、書置の語今と用法が違ふ。當時は、自殺者ばかりでなく、單なる遺言狀をも書置と稱した。こゝは其れである。死者を巫女の口寄に呼出して、遺言狀の文句に對照したといふのである。遺言狀を書置といふ事、中田博士、法制史論集、第一卷參照。（遺言狀の主たる內容は遺產分配であるから句の場合は、その分配に不審な點があり、依つて口寄を行つて確かめたのである）

○

二七〇—吉次が供のしたい事する

普通の供人のやうに解かれてゐるが、是は「金賣吉次がお供する、落行く先は奧州路」と唱歌にいふ、牛若丸である。腕白少年だから爲たい放題をするのである。謠曲熊坂などにヒントがあらう。

○

二八七—寺の餘情に匂はせる蓮

餘情をナゴリと訓ます說と、字通りに訓ます說とが出たが、これは特に、ヨセイと訓まねばならい。意義も文字通りではなく、見榮、伊達といふほどの意である。化粧杖

（ステツキ）を餘情杖と云ふなど其の類で、外聞よく見せる事を云ふ。また、贅、勢など云ふに同じ。

○

二九九――妻の小袖の盡る七種

單に、正月も七種すぎれば平服に成ると解かれたが、盡きるは無くなる意で、正月の內毎日取替えて着る妻の小袖も、さう〳〵は續かず、七日に至つて最早や着替用がなくなつたの意であらう。【昭和十年一月一日夜記】

武玉川二篇正誤

森東魚

卷	號	頁	段	行	誤	正
11	5	6	上	11	さられても來た	―未た―
〃	〃	〃	〃	15	さのだと云ふ	ものだと云ふ
〃	〃	7	〃	14	包を成す	句をなす
〃	〃	〃	〃	24	膳て見てぬ	―見えぬ
〃	〃	〃	下	2	座りこさせられ	―た―
〃	〃	〃	〃	3	御本人に	―ば―
〃	〃	8	上	2	うつのゆふ	うつゆふ（ナラン）
〃	〃	〃	〃	6	外四つ	引四つ（ナラン）
〃	〃	〃	〃	〃	五丁目	五丁町（ナラン）
〃	〃	〃	〃	11	古川柳み俳句夥	古川柳、俳句共に
〃	〃	〃	〃	26	しいが	夥しいが（ナラン）
〃	〃	〃	〃	9	十三日の頃に	十三日の項に
〃	〃	〃	下	4	ゴソやる鼠	ゴソとやる鼠
〃	〃	〃	〃	6	悟人がある	悟入がある
〃	〃	〃	〃	34	響いてぐる	―く―
〃	〃	〃	〃	35	違乘	遠乘
〃	〃	〃	下	36	黎物	邂物
〃	〃	〃	〃	15	人相	入相
〃	〃	〃	〃	21	光に	尖に
〃	〃	11	〃	38	して せ	しても
〃	〃	〃	上	2	ぼしい	ほしい
〃	〃	〃	〃	6	さと無氣味	「さと」トル
〃	〃	〃	〃	7	三觀	三貌
〃	〃	〃	〃	16	三觀三菩提	みへる
〃	〃	〃	〃	1	みへ岡兩	重し（ナラン）
〃	〃	〃	〃	17	女の罪重者	出るか杜鵑
〃	〃	〃	〃	1	出るか鵑	出女の巢（ナラン）
〃	〃	〃	〃	18	出世の巢	（誤ナランモ判斷ツカズ）
〃	〃	〃	〃	8	傑諺	土埃
〃	〃	〃	〃	30	土俟	東魚
〃	〃	〃	〃	14	東省	淋しさが
〃	〃	〃	〃	9	淋しが	夏の
〃	〃	〃	〃	22	其の	初老の
〃	〃	〃	〃	2	神老の	墓も
〃	〃	〃	〃	〃	墓ど	
〃	〃	〃	〃	23		
〃	〃	〃	〃	〃		
〃	〃	〃	〃	22		
〃	〃	〃	〃	25		
〃	〃	〃	上	12		
〃	〃	〃	〃	10		
〃	〃	〃	下	22		
〃	〃	〃	終	〃		
〃	〃	〃	〃	24		
〃	〃	〃	上	21		
〃	〃	〃	〃	〃		
〃	〃	〃	下	22		

〃	〃	25	上	10	困るに入れ	｜口入れ
〃	〃	〃	〃	15	帆揚て	帆を揚て
〃	〃	〃	〃	16	がかる	かかる
〃	〃	27	〃	4	貧樣な	貧相な
〃	〃	30	〃	終	おほれ	おつほれ
〃	11	33	下	4	心持ちが	心持ちか
〃	〃	〃	〃	12	思墓	思墓
〃	〃	〃	〃	14	惚れだの	惚れたの
〃	〃	34	上	20	楓て	机て
〃	〃	〃	下	1	楓を打つて	机を打つて
〃	12	24	上	7	邊をから	邊から
〃	〃	〃	〃	13	手習戸	手習鑑
〃	〃	26	〃	14	俳句	佳句
〃	〃	〃	〃	21	夫孃	夫婦
12	1	8	下	10	秋の家に	私の家に
〃	〃	10	〃	21	蘿月	蘿刀
〃	2	29	〃	12	だから困ろ	だから困ろ
〃	〃	〃	〃	19	しないなさ	しないかなさ
〃	3	39	上	4	書證錄	書燈錄(ナラン)
〃	〃	42	下	21	新川	新町
〃	〃	43	上	9	梅澤	藤澤(ナラン)
〃	4	23	〃	13	なさけないやう	｜やら
〃	〃	25	下	18	目のな同士	目のない同士
〃	〃	26	上	5	橙黄氏	橙黄子氏
〃	5	24	下	10	堀立小展	｜小屋
〃	6	20	〃	11	茉式	茉氏
〃	〃	21	上	〃	内裡雛やう	内裡雛のやう
〃	〃	23	下	10	眠さまし	眠さまし
〃	〃	24	上	6	したくない	したくなる(ナラン)
〃	7	21	〃	21	親戚	親戚
〃	〃	〃	下	8	王川	玉川
〃	〃	23	〃	17	柳雨木	柳雨本
〃	8	22	上	8	なからうが	なからうか
〃	〃	23	〃	2	雁金の樣	雁金の棹
〃	〃	〃	下	3	正保のむろ	｜ころ
〃	10	21	上	6	出女の	出女を
〃	〃	〃	〃	終	さはろのもの	さころのもの(ナラン)
〃	〃	22	〃	16	しほらしさで	｜が
〃	〃	〃	下	〃	茶にして	｜した
〃	11	17	〃	4	心になる眠い時	心になるは眠い時
13	1	8	上	19	掛軸	掛鬪(ナラン)
〃	〃	9	〃	2	前事	萬事
〃	〃	〃	〃	9	見て髭ぬく	貝て髭ぬく
〃	〃	〃	〃	16	さ思ふ	に思ふ
〃	2	18	〃	6	尤も事で	尤な事で
〃	〃	〃	下	9	舂戸べでも	舂戸へでも
〃	〃	19	上	7	と考へた	を考へた
〃	〃	〃	〃	10	柳橋	柳樽

〃	〃	〃	身と心も
〃	〃	〃	頃には
〃	〃	〃	目の上人
〃	〃	〃	氣分で
〃	〃	〃	矢互に
〃	〃	〃	手つき
〃	〃	〃	結ぶ
〃	〃	〃	清堂
〃	〃	〃	相談あ
〃	〃	〃	艷堂
〃	〃	〃	何んが

〃	〃	〃	身も心も
〃	〃	〃	項には
〃	〃	〃	目上の人
〃	〃	〃	氣分が
〃	〃	〃	交互に
〃	〃	〃	思つき（ナラン）
〃	〃	〃	結ふ
〃	〃	〃	清書
〃	〃	〃	相談な
〃	〃	〃	艷書
〃	〃	〃	何にが

以上大體氣付いたまゝの誤植なり、書損なりを正したつもりであるが、當時の原稿と引合はせたのではないから、私の想像や、判斷の間違ひがあるかも知れない。尙解釋に對する多少の補説もあるが他日に讓る事とする。

〃	〃	〃	新地朽る
〃	〃	〃	まてて
〃	〃	〃	這ふくぼむ
〃	〃	〃	大に
〃	〃	〃	人は口から

〃	〃	〃	新地に朽る
〃	〃	〃	まて
〃	〃	〃	這ふてくぼむ（ナラン）
〃	〃	〃	大に
〃	〃	〃	人は口から

川柳家戸籍調（續）

（496）　落合　樂瓢

（係）　緑　雨

(1)姓名、(2)雅號及別號、(3)生年月日、(4)出生地、(5)現住所、(6)職業又は勤務先、(7)好きな句、(8)自信の句、(9)川柳以外の趣味(10)配偶者子供の有無、(11)嫌ひなもの、(12)川柳に手を染めた年月

（497）　原　美靜流

(1)落合康　(2)樂瓢（呑兵衛）　(3)明治三十年二月一日　(4)八王子市八日町　(5)靜岡市稻川町一丁目　(6)土木建築請負業　(7)二と二とは四だが世間はさうでない（飴ん坊）この先を考へてゐる豆の蔓（煙子郎）　(8)あした喰ふ蛤の舌子が見つけ　競馬場すぐ卷舌になる女　(9)都々逸　(10)妻男子一　女子二　(11)くどい事(12)大正三四年頃

(1)原美智遣　(2)美靜流　(3)明治四十三年二月十八日生　(4)島根縣簸川郡鰐淵村大字河下七一六　(5)岡山縣阿哲郡上市村大字井村足立三八〇四　(6)伯備石灰會社工場管理人　(7)風にして尊し紙も散つてゐる（半文錢）涙ていものはこの世にゐるこゝろ（路郎）(8)制服の離別に泣いて春開く　落ちるものそは失望の中の陽よ　(9)讀書、スポーツ　(10)妻あり、一女あり　(11)心にも無い世辭　(12)昭和二年三月學生時代

（500）　石手　河鹿

(1)石手義明　(2)河鹿　(3)大正三年二月廿八日　(4)松山市末廣町二丁目　(5)今治市東門通廿壹　(6)映寫技士　(7)松の内を働く氣かと誘はれる（路郎）針差の如く雪から蔘は伸び（五健）眞情を吐けば下品と蔑まれ（大樓）(9)劍道、エンピツ畫　(10)父母は逝き兄と姉ある獨身者(11)裏の蛇チョロリ二枚の舌を見せ(12)昭和十一年伊豫新海南新聞投句也

髭入門

不死鳥

髭といふものはをかしなものだ。薄い髭でも、あるのとないのでは、顏の形態がスツカリ違ふ。

それに、髭そのものの形式が、人毎に多少づゝ違つてゐて、所謂千種萬態である。

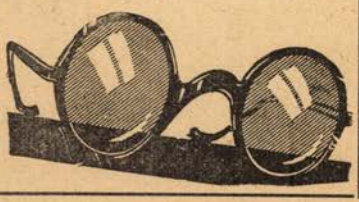
毛並みの軟かいの、中庸を得たの硬いの、それから薄いの、濃いの、繪筆のやうなの、刷子のやうなの、鯰や泥鰌のひげにそツくりなの、兩端を揃へて短く切つたチヤツプリン髭から、俗にカイゼルひげといふ技巧的なの、のびるにまかせた不精ひげ等々々、數へきれないほどいろいろの髭がある。

いつか艸樂君が書いてゐたやうに髭が反つていろ〳〵の滑稽を演じたり、醜態を演じたりするから、迂濶に髭を生やせない譯である。

私の學生時分、クラスの誰彼が髭を生やしはじめたので、私もその中の一人になつたが、なか〳〵うまく生えぬので、生卵の黃味を皿に入れこれを火にかけてコゲ茶色の脂樣の液をつくり、それを塗つて、鼻の下を一錢の齒ブラシで摩擦すれば、キツト早く生えるといふので、鼻の下を眞ツ赤にし、痛いのを辛抱して、やうやく生やしたのがショボ髭で、自分では有る、有ると思つてゐても人はなか〳〵みとめてくれない。一々ことはらぬと、散髮屋もウツカリ剃り落すといふ代物に過ぎなかつたそれでもどうにか髭の仲間入りが出來るやうになつたのか、先月も大阪時事の大浦君から、禿の會に對して髭の會をやるからと出席を促されたが、流石にそこへ出掛けるほどの自信もないので失敬した。暮の忙しい中で、なが〳〵と髭のことなどを書ぐひまがあるのかと素見かされても困るが、こんなのを忙中閑ありと云ふのであらう。（一二一・三）

小川眼鏡店

眼鏡ばかりは信用の出來る店へ



大阪京町堀通四電停西
土佐堀七二六〇番
振替大阪五〇六五八番
立賣堀北通一槌橋北詰

日本名所名物川柳

四國の巻

前田五健選並畫

（九）珊瑚・鰹節

感吟三ッ

番豪の注意珊瑚のおちかゝり　雪子

鰹節干す海岸の南風　世間音

鰹節太平洋の潮の味　紫香

○

珊瑚珠の流行つた頃をなつかしみ　觀潮樓

此の内に一つ五圓の鰹節　勝人

鰹節借りに來るのもよい隣　英賀夫

珊瑚珠網を破つて儲けさせ　世間音

日本趣味珊瑚の珠のかゆいとこ　雪子

○

本場だけあつて祝の鰹節　秋無草

鰹節ならして「土佐だ」まかりまへん　同

爪彈の珊瑚の櫛をさしてやり　同

鰹節お國自慢で嫁が來る　憲一
母の持つ珊瑚はみんな虫が喰ひ　同
省營バスカフスボタンは珊瑚なり　木履
鰹節削れば土佐の色と知り　同
お祝の鯛の役とる鰹節　竹阿彌
鰹節かゝされ飯の焦げてゐる　紫香
鰹節逆さに削り叱られる　世間音
汐燒のした娘が磨く鰹節　同
どう見ても虫と思へぬ珊瑚珠　同
桃太郎の童心に觸る珊瑚樹　水客
藏入にされ鰹節の目出度けれ　同
床の間の珊瑚舊家を物語り　方眠
珊瑚珠時世に向かぬ寶なり　觀潮樓
珊瑚樹も花が咲くのと子に聞かれ　同
鰹節茶漬の時に用があり　せいち
土佐節に日本人の味があり　葉光
入學の机を飾る枝珊瑚　同
木屑干す樣に鰹の並べられ　英賀夫
水引をかけて嬉しい鰹節　同

軸

圖拔けての大きさ笑ふ鰹節　五健
鰹節削る音から黃昏れる　同
ヨサコイの節とは別にある珊瑚　同
自珊瑚牡丹の蕊に意氣を見せ　同

★

前田五健先生の選句と麗筆によつて好評嘖々であつた四國の卷も、珊瑚、鰹節の發表で打切ることにしたが同時に山川紫明先生選、朝賀大鱗先生畫の京都の卷も先斗町の募集を以て一ト先づ打切ることにした。京都の卷の未發表原稿は更に他地方の名所名物川柳を募集しこれと交互に發表して清鑑味讀に資することとした。期待を乞ふ（編輯局）

なほ前號の名所名物記事中「五右衛門が置き忘れた」の十字抹消。

一路集

募集句

竹

西田艸樂選

竹の都會の庭に陽が足らず　兄　兄
物干の竿一つばいに日木晴　キヨシ
竹箒高野の山の秋を掃き　木　履
眉晴れて興津へ戻る竹の杖　同
(人)竹馬の股をくゞるは女の子　五迅發
(地)竹ヒヨイト調子にのつて割れすぎる　蒼梧樓
(天)藝で喰ふ女の氣性竹に似て　文　庫

選後評

「竹」、亭々天を指す竹の美、竹林賢人の圖は川柳人のネラヒでないと見え、天然美の竹を詠んだ句が少く、あつても川柳味が乏しいのは自然の勢ひ、かういつた點から押して竹といふ題は六ケ敷いと思つた。從つて選句も骨が折れた。三才人の句、近來かういふ句が高點に拔ける傾向が少いのでないか。輕い味とわざとらしくないユーモア、私はこんな句が好きである。地の句、竹の性質をこんな風に正直に說破して而も無條件に共鳴さゝれる點は句主の手並を賞したい。天の句、竹を破つた樣な氣性で云々と云ふ句が隨分あつた。「竹に似て」の表現も少々無理に聞える樣だが、上五中七がそれを補つてゐると思ふ。一藝に秀で、而も女で喰つて行く自信の强さは、竹の如く直く、淡白だといふのである。

竹楊子　出張といふ　朝を起き　涙　二
竹細工湯の匂ひする　町をぬけ　紫　香
振分の　荷は靑竹で　驛へ　立ち　南鴻路
細竹をたよりに大きな菊が　咲き　正　柳
孟宗竹　早熟といふ　體で　立ち　曉　童
鳥追ひの　姿すらり　と竹細工　其　臭
一本の竿竹に親のもの子のもの　シナ子
これが竹かいなと見られる竹細工　春　秋
竹針をつけかへて聽く　ベートベン　陽出男
恩給で食つてゐるぞと　竹の垣　雨　城
閑居して　竹の標札なぞをかけ　春　草
水害地竹やぶだけが　殘つてゐ　海　棠

竹獨樂は塔なき　彼岸にかゝはらず　葉　光
竿竹へ　雜巾かけるよい　日　和　美和夫
眞つすぐに立つ氣の竹に　風があり　沐　天
竹籔の　つゞく　夜道の　足の音　いの助
竹　籔　が　續　く　故郷の道白し　空太郎
新らしい　酒樽締めた　竹の色　由　布
竹細工　炬燵　蒲團は　花　模　樣　燕　人
かうも　値の違ふ尺八撫でゝみる　喜　由
添竹へ　重たくかゝる　雨の萩　南　路
竹破つた　樣な　氣性で　戀は戀　水　客
一幹の　竹反撥の　意地　があり　菊　路
竹のごと直くて早く　首になり　灯　竿

川柳人協會にお入り下さい

川柳人協會はホントの川柳を社會に弘く知らせるためと川柳の愛好者がお互ひに仲よく手を繋ぐために生れた横の運動をするのが目的です。從つて協會の總會は全國各地で次ぎ〳〵に開會され、斯界の大家が出席して講演や句作によつて向上發展を期する一方、相互の親睦を圖る機會を作りたいと思つて居ります。川柳人協會が主體となり各地吟社の共同後援で大會なども開きたいと存じます。

會員は毎月『川柳雜誌』といふ柳誌を配布される外、諸會合に際しては會の性質により入場料の割引又は免除、其他いろ〳〵の持典を受ける權利を持つてをります。入會は誰でも何時からでも出來ます。申込書に會費一ヶ年分三圓、半ヶ年分一圓六十錢を添えて協會へお送り下されば正會員章をお屆け致します。送金は振替（大阪三一五一四）を利用して下されば一番安全ですが、小爲替か郵券（二錢以下）でも結構です。御友人にもおすゝめ下さい

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳人協會

理事長　麻生路郎

電話天下茶屋二五七九番
振替口座大阪三一五一四番

◇今までに（川柳雜誌）を月極又は半ヶ年極で購讀してゐられる方で入會を希望される方は更に一ヶ年又は半ヶ年分の協會費を前納され、は殘存誌代の月數だけ延長して正會員章を送り其の月から正會員の資格が出來ます

切……取……線

川柳人協會申込書

住所　市　區　町　丁目　番地

氏名　雅號　職業

會費　年分前納の上入會申込みます

川柳人協會御中

川協の頁

★

柳界多事の際、本協會名譽會員　三面子　岡田朝太郎氏が十一月十三日相州葉山の自邸に於て溘焉として逝去された。會員諸君へ御報告申上げると同時に、謹しみて哀悼の意を表する。

★

去る十月二十二日拂曉、青森の北部保養院が罹災し「甲田の裾」を出してゐた病柳友達は目も當てられぬ惨狀の渦中に卷き込まれたので、この寒空に傷つき痛める患者の川柳人を慰めるため「川柳隊」の青森川柳社（青森市片岡一七七）並びに「みちのく」のみちのく吟社（青森縣黑石町）では慰問金募集に着手した。前者のメ切は十一月末日となつてゐる。後者のメ切は不明だが、多少遲れても御同情金のことであるからお世話下さることと思ふ。至急御據金が願へれば幸ひである。十二月中旬ごろまでなら弊會でもお取次ぎいたします。

★

川柳人交驩の意味から云つても、先づ協會の名譽會員、理事、評議員、正會員のお互ひ同志が顔を知り合ふことが必要であるので、御寫眞を誌上に掲げて親しみを早めたいと思ふ。なるべく近影を御惠與ありたい。これは締切日を決めないで、先着順にボツ〳〵發表する積りである。

故岡田朝太郎博士の面影

ああ三面子

刑法學者としても、古川柳研究家としても一代の權威であつた三面子岡田朝太郎博士が十一月十三日相州葉山の自邸に於て溘焉として長逝された。行年六十有九歳、法名は法性院釋朝樂居士。

×

古句畑では曩に今井卯木、武笠山椒兩氏を喪ひ、次いで西原柳雨翁に告別し、今又岡田三面子先生の訃に遇ふことは川柳を體系づける上に於ての一大恨事である。

殊に博士の該博なる知識と不屈不撓の研鑽に俟つところの多い柳界に於て博士の永眠は何ものにも代へ難い損失と云はねばならない。

日本隨一の柳書の藏書家であつて、しかもこれを自他のために活用し、活用せしめられたことは川柳に生くる者の牢記して謝恩すべきであらう。

故西原柳雨翁の編著になる大部の柳書の素材と、これが指導は殆んど博士の川柳愛に依る好意だと云つても敢て過言ではなからう。柳雨翁の研究上の指導と補遺、柳書上梓の斡旋、生活上直接間接の後援それ等を思ふ時、博士の人格の如何に高潔であつたかは想像するに難くない。由來學者は眞理に沒頭するため頭の冷徹さが自然人情味に欠陷を來たすものであるがひとり岡田博士に於ては人情味豊にして機宜に適した處斷に出で、法の眞精神を活かされた點、人間三面子の全貌に觸れた感がある

その一二の例を擧げて見やう。

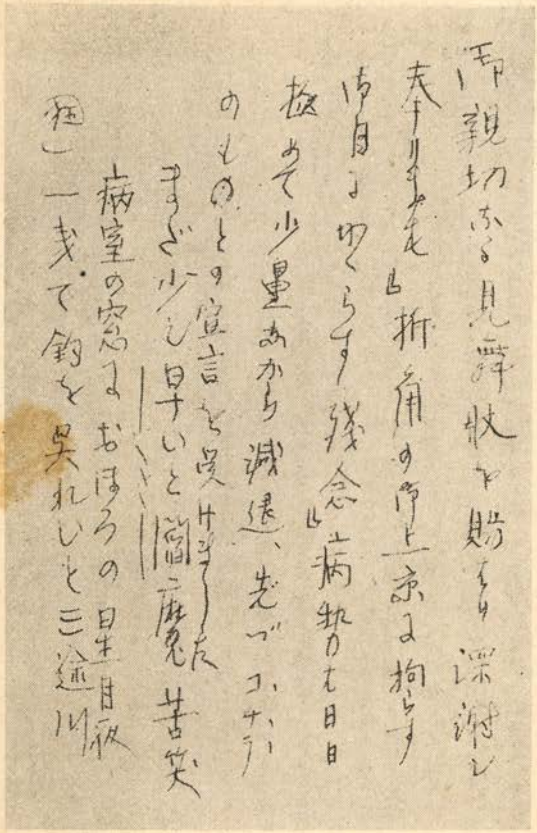
孫文の中華同盟會に參加した汪兆銘が肅親王暗殺を企てて捕へられたとき、時の司法大臣はその處置について岡田博士に相談があつた。博士は「死刑に處するよりいつそ逃がせ、所刑にすれば騷ぎが大きくなる、逃げたものは仕方がないと云ふことで濟むから」と云はれた。そして博士の意見が用ひられ、後年汪氏は政界の大立物となつた刑法學者の博士にこの味ふべき言葉のあつたことは甚だ面白い。

これに反し自己に對しては嚴として法の侵すべからざる精神を以てのぞまれ法の文字以上の責任感を果されてゐる。

その例として博士は令息三男の事業失敗に依る多額の負債を敢然として引受けられ――法律的には親は獨立した息子の債務辨濟の義務はないが――月々之れが償還に努められた。その義理堅い道義觀には博士を知る限りの人々は讃嘆して止まない。中には債權者の方で辨濟を求むる意思が無い者にまで一々支拂つてゐられた。そして博士は單獨に戸塚方面にさゝやかな借家住ひをされ、俸給はあげて全部をその令息の債務辨濟に當てゝゐられたとの事である。

博士は僅に十六圓の借家住ひをして、父性愛と責任感の二つの帳消にひたむきにすゝまれたのである。この苦境を知つた某銀行の頭取がいたく同情して特殊な厚意を示されたが博士は頗ぶる眞面目な態度で「そんなことをされては貴方は背任罪を犯すことになります」と頑として受容れられず、その銀行からの借入は綺麗に元利揃へて辨償されたと云ふことである。

恐らく數萬圓に達してゐたであらう博士のこの苦しい債務辨濟も、もうあと一年位で、すつかり皆濟の見込みがついたので博士はその門下の大學教授達に時々肩の荷が下りたやうな話をされてゐたさうだ。


御親切なる見舞狀を賜り深謝し
奉りそろ　拙角の帝上京を拘束
時日を切らす殘念病勢も日日
極めて少量あから減退、先づ心配
のものとの宣言を受けそろ
まづ少し日付いと閣慶苦笑
病室の窓よりおぼろの月夜
拙一戈で釣を呉れいと三途川

私がこの九月の中旬に上京して眞ッ先に訪問したのが、明大の岡田博士であつた。いつも葉山へ來て泊まれ。何曜と何曜は葉山の方にゐると絶えず曜日を知らして頂いたが遂にゆつくり葉山へは伺へなかつた。せめて明大でと思つて訪れたところ既に病を得て帝大の吳内科へ入院、面會も謝絶されてゐたのであつた。單に御見舞狀にとどめ所用を果して歸阪したところ、下揭寫眞版の葉書を寄せられた。このはがきの表書には

東京帝大病院、吳内科。

七月廿六日　　岡田三面子

とあるが、本郷局のスタンプは九月二十六日となつてゐる。九月を七月とどうして書き違へられたものか、それは不明である

×

最初は喘息で苦しんでゐられたさうであるが、病名は腎臟病肝臟病、心臟病等々併發遂に起たれなかつたのである。

まだ少し早いと閻魔苦笑ひ

の句を見ても、まだ死を豫期されてゐなかつただけにこの突然の訃を知つて甚だ悼惜に堪えない。私が最後に博士に會つたのは昭和八年十月十五日川柳雜誌社主催の東京句會の時忙しい中から顏出しをして下さつた時である。博士の著書としては枚擧に遑がないが、柳書の主なるものを擧げれば「寬政改革と柳樽」「諧曲と川柳」（故安藤幻怪坊との共著）他に隨筆「虛心觀」がある。「川柳雜誌」にも幾多の玉稿を寄せられたが、第二卷第一號にある「柳樽初篇二篇の丁數順序」の如きは實に博士ならでは能はぬ尊い文字である。

×

博士の逸話と追憶を書けば果てしがない。

謹んで瞑福を祈る。合掌

（麻生路郎）

○

故人の略歷　岡田朝太郎（雅號三面子）明治元年五月二十九日岐阜縣大垣市（士族）に生まる。

明治二十四年東京帝國大學法律學科（參考科第二部）卒業、（當時首席は前政友會總裁鈴木喜三郎、岡田博士は二番）

尙同期生中には晩年政界及び關西電鐵界で活躍された井出繁三郎、一年後輩の中には、若槻禮次郎、荒井賢太郎、織田萬小川平吉等の諸氏がある。

博士は佛蘭西語に特に堪能、十七歲のとき當時日本民法の起草に來朝してゐた佛人ボアソナード氏の通譯として從事され高等學校、大學在學中も之を繼續。大學卒業後直ちに明治大學の講師となり明治二十八年には學術研究のため獨逸へ留學歸朝後明治三十三年に帝大教授に任ぜられると共に法學博士の學位を受く。明治三十九年迄帝大教授、同年清國政府の法律顧問として同國に渡り、刑法、裁判所構成法、法院編成法等の起草をされ、傍ら北京の朝陽大學の教授となる。大正四年迄支那に留まり、同年歸朝と共に明治大學、早稻田大學の各教授として刑法を講じ、今日に至つたものである。

『六厘坊十句』の再檢討（四）

木村半文錢

（續）元來、上五に斯うした名詞を置く場合即ち五音になる名詞を置く場合は古句に於ても慣用上許されてゐる。例へば

(1)鍋いかけすてつぺんからたばこにし
(2)取揚婆屏風を出ると取りまかれ
(3)武藏坊とかく支度に手間がとれ
(4)國の母生れた文を抱きあるき

の如く、(1)は若し上五が「いかけや」の四文字から成る名詞ならば「は」の字を使用したであらうし、この句も亦「鍋いかけは」でなければならぬ筈である。(2)(3)(4)の場合も同斷である。然し、上五と中七下五の聯關性に意味上の斷絶は認められぬ。亦

扇箱鳴らして見てはのしを附け
初鰹樂のやうにもりさばき

の如きは初五と中七との間に「を」の字を挿入する場合を指す。

寒念佛ざらの手からも心ざし
楊弓場つれをまつ間のやりばなし

の如きは同じく「に」の省略であらうし、亦

綿帽子風をおさへて長ばなし

の如きは同じく「の」の字の省略とも見られ得る。斯うした省略の例は頗る多いのであるが、別に省略したがために上五と下の句語とに聯絡の斷たれたが如き非難は餘り聞かないのである。要は、短詩型としては斯うした省略こそ却つて適法とさへ思はれるほどに慣用上の多樣さがある。六厘坊の句の場合「もつれ糸」と「小猫」との位置は空間的距離の隔たりが存するか、何うか勿論「に」の字があれば其の心配は無用だが、省略されてゐる以上は原句を忠實に吟味しなければならぬ。

私は、慣用上差支えのないことを認め、且つ、これ位ひの連想――と言へば空間的距離よりは時間的それの如く感ずるが――は、一呼吸詩としては許されていゝと信ずる。空間的よりは時間的であるといふ意味では飴ン坊氏の「糸其の物は小猫のぢやれた爲めにもつれたやうに解せられる」と言ふ點に照應されて一考される。なる程「もつれ糸」は「もつれ糸」として現實的に存在するのか、小猫のために「もつれた」のかハツキリ經過は分り兼ねるが、併し、そこまで詮じ詰めなくとも現在「もつれてある糸」として、その經過を問ふ迄でもあるまい。要は、小猫の方が主態である。それで最後に私は劍氏の改作よりは原句の動きの方を自然的な可憐味として愛する。若し改作するのであれば「麗さ小猫のおどるもつれ糸」といふ風に――必ずしも佳句ではないが――位置をハツキリ印象せしめたいと考へる。

四

内裏雛年中顏を包まれる

日本坊　おもしろい。然しチト藥味が足りない樣に思ふね。モ少しピリリとしたところが欲しいが……我輩これに對しての心持を形容で申さうならば、ヤ御馳走と一箸つけて、さて物足りなアいやうな顏の、箸を持つ手の甲で横顏を一つ撫での、鼻白んだ體――でござい。

花紅坊　餘りに呆氣ないね。いくらサラ〳〵とした處が良いと云つても矢張りお茶漬には奈良漬か何かがなければ。

松窓　僕はこの句の價値を認めず、中七下五ともに厭やなり、六厘も亦こんな句を作るか。說明に過ぎて面白からず。

七厘坊　說明に過ぎて面白からずは穿つた評だ。あまり說明がすぎますと……

が出ます東西！〳〵。

六厘坊 「年中顔を包まれる」と云ふのは平凡かも知れぬが説明にすぎるとか何とか云はれるのは片腹いたい。何所の點を以て説明にすぎると云ふや松窓、七厘兩先生の明答を望む。

角戀坊 年中と云ふのが此句の難です、如何か。節句の折には此の覆面を外されると云ふ意味を現はして貰はれば此句は句に成らぬだらうと思ふのですが如何ですか。おこつちやいけない。

飴ン坊 此の句は頂戴でけまへん、と云ふと句主から、どこがどうで頂戴できねへかと反問されるかしらんが。内裏雛が年中顔をつゝまれてゐるは平の凡だ。例之文明人年中着物を着てござるでは川柳にならぬ。餘り多くは申しませぬ御再考〳〵。

劍花坊 年中とあるが難、だとの説がだん〳〵出たが、それは構はない、否寧ろ「年中」とあるから川柳である。三月の節句に一度出ることは出るが、それだけが命であたら美しい顔を一年中紙に包まれて居るのは氣の毒だとして可笑味が生じる。平々凡々のことをいつて平々凡々でないのが川柳、僕の句に「梶原はふんだん赤い面で出る」といふのがある。住い句だとも思はないが、平々凡々だとは云はせぬ。其當然の事が他の多くのものから比べて可笑ければヤハリ滑稽だ（半註。傍點は六厘坊が挿入したものらしく、特に上部に「卓見」（六）と挿入してゐる）美しい顔をして年中顔をつゝまれて居るものが他に何がある。説明に過ぎるとか、平々凡々だといふて際限が無くなると「居候三杯目」も平々凡々説明に過ぎると評せればならぬやうになる。「年中」があつて大に引き立つ。

六厘坊 「年中顔を包まれる」と云ふのは内裏雛は年に一回より顔を出さぬから年中顔をつゝまれる樣なものであると云ふのを誇張して云つたのである。節句に覆面を外されると云ふ意は自らそのうちに含まれて居る。平凡の難は劍先生の説で明かにされるであらう。

なぐさ 此句評最早餘地なし。頂戴。

ふくべ 「年中」は六厘坊の云つた通りで平凡な句は平凡だが、其所に一寸可笑味がある。（未完）

川柳塔

西村明珠

證明をしてるが如き冬の汗
戸を叩たく時から金の事と知れ
リユクサック人におくれる恥を知り
自惚れの美人が腹を立てるなり
金のあるうち積善の家とされ
飛行機を心ゆくまで巡視見る

上首尾で人を誘ふてみたくなり
書留は立つて讀むもの氣がせはし
義理の身の遠慮勝なる淡化粧

喜多春秋

言ふたこと云はぬといふて親父勝ち
煙突を包んで暮れる秋の雨
ムツとしていやおもしろいおもしろい

西田艸樂

瀧へ來てヒスの女を慰める
悲しみを散る葉が誘ふ爪の色

錦浪・谷孫六を悼む

十一月十三日に岡田博士が長逝され、哀愁の幕に閉ざされてゐた時も時、同月十七日に「ヤノケサ七、一五フンシスマサミッ」といふ塚越君からの入電に接しひそかに君の近状を憂ひてゐただけに、愕然として、暫くは聲も無かつた。

錦浪矢野正世君は元、矢野きん坊と稱し、「當世柳多留」「大正柳多留」等を編み、明治、大正の柳壇に飛躍し、後錦浪と改め昭和に入つてからは主として君が天職に没頭し、少しく影をひそめてゐたとは云へ「なるほど岬紙」の著を世に送り、次いで平凡社から川柳漫畫全集を企劃せしめる等、東都一流柳人等の背後にあつて重きをなし、柳界稀に見る才人であり、しかも努力の人であつた。

殊に谷孫六のペンネームを以て世に知られ、所謂岡辰式特種金錢教育を説いてその天分を思ふがまゝに驅使し、天下の孫六ファンを唸らせたことは今更喋々を要しないところである。

その川柳に就いて見ても「貯金帖算筍の奥の奥へ入れ」の如く、何處までも孫六畠のものを掘下げてゆくところ、又一家の見として敬意を表せずにはゐられない。いさゝか愚痴に似て恐縮の外ないが私が九月中旬上京した際、君を「財の教」の事務所に訪ひ、見るからに面白くない健康狀態に接したので「君はそんながらだをして出社するといふことは絶對にいけない。何故社員を君の宅へ一、二時間でも出社させないのか」と云つたところが、「イヤそんなに悪くはない。むしろ少しく良くなつたのだ、心配しなくても大丈夫だ」と云ひながらも、暫く話してから別室へしりぞき眠りをとつてゐたがその後、浦和に居を移し、そのたよりの中に、「いろ〳〵御心配に預り難有く御禮申上ますほんとうに友なればこそですあなたも先度お目にかゝつた時より元氣さうに見えて羨ましく存じます私もせい〳〵靜養するつもりで轉居しました新らしい空氣が吸へるだけ何よりです」とあつたが、塚越君の通信に寄ると、看護婦携帶で出社したり、重態に陷入つてからも、口述して講談社の原稿を果したとあるから全く仕事そのものに没入してゐたその心境には、敬服の外はないが、今少しく自己の健康に留意して欲しかつたのは私ひとりではあるまい。天、このオ人に壽を藉さず、僅に四十有八にして幽明境を異にされたことは多事多端な柳界にとつては一大損失であり、私達友人としては痛惜に堪えない次第である。

終りに君が法名 卓心院泰賢正行居士を稱へ、この一文を靈前に捧げる（路郎）

○

略歴　本名矢野正世　明治廿二年一月茨城縣北相馬郡大野村野木崎に生る同四十五年小學校卒業の學歴のみで東京毎夕社會部記者として入社編輯局長營業局長兼支配人に累進この間十有四年大正十四年退社同十五年讀賣新聞社營業局長に就任昭和五年同社を退社著述生活に入り谷孫六のペンネームによつて金錢教育を提唱昭和二年一月花王石鹸の取締役支配人昭和十年退社本年五月一日「財の教」創刊號を出す同年十一月十七日没

川柳雜誌社京阪神各支部聯合

忘年川柳大會

緊張々々で押して來た川柳道精進の壓を一擧に切つて落す京阪神各支部聯合主催の忘年川柳大會は、本來を以つて堂々第十回、柳人湯望の句莚が展開されることになりました。加ふるに麻生路郎師が川柳人協會を創立され柳界のために熱と力を以つて益々活躍される事を誓はれた記念すべき年なのであります。この二重の喜びを以つて、今年こそ忘れる事の出來ない興趣ある大會にしたいと幹事一同總がかりで腕によりをかけてゐます御承知の通り當夜は桁を外づした賑やかな句會でありますから柳人交驩の意味から多數御友人を誘ひ合され御來場下さるやう切にお願ひ致します。

日時　十二月十三日（日曜日）夜六時半

會場　道頓堀倶樂部　大阪市南區日本橋南詰東入南側（電南二七四八）

司會者　後藤青兒　朝田新水

開會之辭

兼題　髭（三句）　麻生路郎氏選

同　炭俵（三句）　橋本綠雨氏選

講演　漫談「川柳人打診」　麻生路郎氏

同　政界ユーモア　庄萬よし氏

閉會之辭　西田艸樂

會費　三〇錢（川柳人協會員章提示の方は二〇錢）

賞品　天地人五客、十秀へ呈賞（但し出席者に限る）

優勝盃　兼題、席題を通じての最高點者へ呈上

出席者全部に　川柳繪葉書

川柳マツチ（麻生路郎氏執筆）其他粗品を呈上。川柳雜誌社スタンプは當夜會場に備付けてありますから御自由に御使ひ下さい。（鉛筆持參願ます）

記念撮影　希望者に實費で頒つ

支部と幹事

道頓堀支部　庄萬よし　九三會支部　北山悟郎
神戸支部　喜多春秋　梅田支部　水谷鮎美
螢ケ池支部　谺流之介　京都支部　明石柳次
御旅支部　江戸みつる　天王寺支部　須崎豆秋
鶴町支部　宮岡白峰　御池橋支部　西いわを
大鐵局支部　山本喜山　光耀會　竹內機見女
今里支部　市塲沒食子　上町支部　廣原都會人
光笑會　永田里十九　十三支部　淺野牧人
兵庫支部　三崎陽幸

主催　川柳雜誌社　京阪神支部聯合

忘年川柳大會事務所　大阪市南區疊屋町六　カナメ喫茶店（電南七五五一）永田里十九方

後援　川柳雜誌社　大阪市西成區玉出本通三　電話天下茶屋二五七九番

川・柳・横・町

☆

「現在中華民國でパリツィてゐる一流人物中には三面子門がナカ〳〵多い。尤も川柳の弟子ではないが胡漢民、閻錫山などもその一人で、日本亡命中には葉山の岡田別邸へ隠れてゐた政客もあつた。三面子は別だが法學岡田朝太郎の名は日本よりも支那においてより有名である。

☆

三面子は佛蘭西語を尤も得意としたが其の外英、獨、支那語は勿論、伊太利、スペ

いろは祭

たかを・あきを

「いろは祭」といふ行事を大阪市の主催で、毎歳やつてゐます。われわれ兒ども黨の肝煎りで場所は天王寺なる動物園、成るべく抹香くさくなく童心の現れとしたいので、壇上には稚兒大師の繪像を奉安、ある高德の筆になる「いろは」四十七文字の大額を左右にかゝげ、寶前へは宣眞高等女學生の「いろは歌」奉唱の間に香華献納の行列が進む。眞言宗の大僧正たちの心經讀誦や講話がありまた舞臺の下、左右流れて「いろは文字」の散らし書きや童たちに砂の上で教へてゐられる大師の御筆跡なんかを畫にした色とり〴〵の萬燈籠が吊るされるなど、まことに美はしい光景でした。

さて「いろは文字」はいつの代、誰人が作つたものか、ハッキリと判らない。難かしい漢字をくづし〳〵ていつの間にかできたものらしい。「いろは歌」の方は勿論、弘法大師さまの御作で、この「いろは歌」のおかげで、「いろは文字」は世に弘まり、日本の文化をどれほど進ましたか、その廣大な恩德を讃へ奉り「いろは」の再認識をしやうといふのがこの「いろは祭」の趣旨なのです「いろは歌」は釋尊御說法の「ねはん經」にある「諸行無常——」の四句の偈を誰にも解りやすくするため大和言葉に御譯しになつた實に尊い

イン、オランダ等々の言葉にも通曉してゐた。

☆

現在中華民國から日本への留學生は早大と明大が一番多い。これは三面子が兩校で教鞭をとつてゐたからで三面子の人氣おして知るべしである。

☆

明大では一番古い先生ださうで、講義時間の合間などにも常に何かこつ〳〵筆で書いてゐられたさうだ。川柳も常に作句され大學が野球に勝つても川柳、負けても川柳を作つて皆を笑はされたさうだ。

☆

三面子は晩酌藻の一人でちびり〳〵やりながらも古柳書を繙く寫筆をするといふ熱心さだつた。

☆

三面子の葬儀には滿洲國公使も自ら列席されたし、廣田首相は國事多端の折柄わざ〳〵葉山までお悔みに赴かれたとの事だ。宰相の弔問を受けたと云ふ一事でも人格の廣大さが偲ばれてお互川柳人の肩身が廣い譯。

藝術作品で、あの中たゞ「うゐ」の二字だけが「有爲」の呉音そのまゝであるも意味深くてあり難い。現在の日本語といふものは古來いろ〳〵の外來文化を吸收して、多くの佛教語や中には梵語さへ採り入れられてでき上つてゐる、近ごろはまたヨウロッパの舶來語さへ盛んに混入してきた、「パ、マ、」でムキになつて怒つてみたところで大昔からそうなのだから仕方がないまたそれがわが國の持長でます〳〵日本をして大ならしめるものではありますまいか。

弘法大師が折角お作りになつた「いろは歌」さへ、その難有い尊い意味は今日の兒童たちは勿論現代人にはあまりに古語で解りにくい、も一度これを現代語の歌に飜譯し直す必要があると思はれる、第二の空海現はれよと叫びたいのです。

いま「いろは祭」によつて弘法大師の恩德を讃へ奉るにつけても、傳

☆

三面子が支那から歸朝の時、大理石の彫刻……鷹のまさに飛び立たうとして兩翼をひろげた、その長さは數間もあると云ふ大きなものを發見した。それを美術參考品として是非共日本へ持ち歸りたいと、ない中から一萬數千圓を工面してこれを買取つたのはいゝが、さてそれを運送するのに當惑し、たう〳〵海軍へ賴んで軍艦に積んで持つて歸つたと云ふ話もある。

☆

三面子揮毫の落款には岡田朝太郎を略して「岡朝」と書いてある明大の記念寫眞帳の筆蹟にもこの「岡朝」で出てゐる。

☆

三面子は去年の夏休み中を通して毎日十四時間勞働をされたさうだ。これは何等かの著述に從事されたのであらうが、十四時間と云へば朝の八時から夜の十時迄である七十歳に近い老體でよくそれだけの精力が續いたものだ。

しかもその著述は恐らく三面子の名において發刊される著書ではなくて、代筆に類するもの或は筆寫、筆稿に似た一つの勞働

教大師の御恩をも一緒に讃へたいと思ひます。昔の寺子屋で手習の手本にするものには必ず、京の字を終りに附けたもので、あれは限られた四十七字ではなほいさゝか足らぬ意味を最後につけた、限ち「京」は「寂滅」の最境地「涅槃」の義であるのでせう、京の都は一條から九條まで袈裟に形取つた曼荼羅で、まことに畫龍點精の妙ありといへます、この京の字を附けたのは最初傳教大師だと傳へられのゐるからです。

將來、この「いろは祭」はもつと〳〵大きな文化的教育的の意味を含めて「片假名文字」も「漢字」も「ABC文字」も、「朝鮮文字」も、さては「滿洲蒙古文字」をも入れてのとても素晴らしい大祭にしてみたいです。各文字の優劣比較をするならば漢字よりも假名、假名よりも朝鮮字や蒙古滿洲文字です、ある奇妙な蒙古文字こそは假名文字よりも數等勝れて、ロマ字と比べても決して劣りはせぬほどの理想的なものですが、いろ〳〵の傳統と習慣はなかなか好いといつたからとてすぐに實用に使へるものではない、たゞ今日までの文化に貢献した各種各樣の文字に對してその發明者や民族の文化に敬意を拂ひ、將來人類の進化發達に資したいものです。

前年、私の男の兒が丁度この「いろは祭」の日に病沒した。そこで麻生路郎君が私のローマ字論者であるのを知つてゐたものだから、こんな川柳を寄せてくれました。

君の子は羅馬字で書く砂手本

ではなかつたかと想像される節があるのでこれが壽命を縮めた遠因かも知れない。

☆

今更追慕の情禁じ難いものがあるので本欄全部を三面子岡田博士に捧げることにした。（不死鳥）

おでん屋に例をとるのも少し變な話だが、よくはやつてゐるのは立派なスタンドではなくて寧ろ、屋臺に毛の生えた樣なうす汚い軒店の方なのである。筆者は斯ふ云つた感じを、最近の大阪三越で受けた。と云つたゞけでは解るまいが、三越では、大阪デパート界では名物であつた、八階吹き抜けの中央ホールを埋める改裝工事を、夜に日を繼いでやつてゐる爲に、餘り綺麗でもない板圍が各階から眼にとまる許りか、東西舘の通路も大分挾められてゐる。それだのに、來客はまさに押すな押すなである。傳統的な顧客層を持つ强みと、マークの魅力とは、斯んなところにも働くものと見える。

×

其の板圍の中では、力强いハンマーの音や鐵鋲をかしめる響やらが、しきりに聞こえてゐるにも拘らず、圍のこちら側では一本何百圓もの丸帶や銀狐の毛皮が次々に賣れてゐるのだ。鳥渡考へると、隣の部屋で壁を落したり、柱を取り替へたりしてゐる所では酒の味が無ささうなものだが、三越では現在さうでないのだから不思議だ。然し、これも三越だからこそ見られる圖なのかも知れない。

×

三越で拾ふ

R

エレベーターガールの服裝がよくなつた事も眼についた一つだ。肩の線に膨らみを持たせたのが新型ださうだが、婦人服賣場には、專屬デザイナーとしてクララ女史が參りましたと聞かされて、行つて見ると、なるほど女史は、美しいブロンドにも愛嬌を漂はせ乍ら御注文を伺つてゐる所だ。其の横には、女店員であらう、今年流行ると云ふチェック模樣に、思ひ思ひの型を取り入れたスーツで、お客の御用に應じてゐる。女店員の洋裝は統一されてゐる筈だのに、此處だけは特別扱ひにしてゐるのも、仍り商賣の行き方と見へる。

此の型はいかゞと着てる女店員

×

筆者が二階の休憩室で憩んでゐると、五十からみの男客が、「連れの者にはぐれたんですが……」と云つて茶番の女の子に店内放送を賴みに來た。一禮をして女の子が去ると間もなく、「お客さまに申上げます…」と各階毎にスピーカーから至極丁寧な聲が流れてゐる。便利なものだ。店の人の話では、時々優雅なレコード音樂も送るさうだが、顧客の利便と情操教育との一石二鳥と云ふ施設は、惡くないものであらう。尤も、「奥樣が、唯今八階ホールでお待ちで御座います」などゝ呼ばせるのはチトどうかと思ふが。

×

八階ホールと云へば、隨分立派になつた。何しろ三百の椅子席があつて、採光、照明はもとより、冷暖房の施設も完備してゐると三越が自慢するだけあつて、全く手頃な集會場である。これを無料で使はせると云ふのだから、最近では申込がウンと增えて、斷るのに骨ださうだ。「…何しろどなたでも私の方では大切なお客樣ですから」とホールを見せて呉れ乍ら、三越は仲々うまい事を云ふ。

十一月の末だと云ふのに、もう新年の清興を盛る三越ホールのプログラムはギツシリ滿員だと云ふから、客を引くのに上手なのも流石に三越だと感心した

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

催し

▲十一月廿日すゞか居で「川・協について語る」會が山雨樓君によつて開かれ、啞三昧、琴莊、花戀坊、星文洞、山雨樓、車山、瑤天、太郎丸、玉兎期、すゞかの諸君から寄書を頂く。

▲番傘川柳社では二十五周年記念事業を計畫され、目下着々とその準備をされてゐる。一月十日「全國川柳大會」開催於大阪中之島中央公會堂、午前十一時開會兼題「吉日」「恩師」「舞扇」の諸君から寄書を頂く。

▲坂井久良伎翁の春掛頒布會が十二月十四日午後一時から東京牛込區神樂町二「末よし」で開催されるとの事會費一口十五圓。

▲阪大川柳會十一月例會は二十五日夕惠濟館三階に於て路郎師を迎へ開催された。

▲「喫茶往來」の發刊記念句會が二十四日夜川柳喫茶店別寮に於て開催された。

▲住友金屬鑛業所親友會(尼崎)の例會が十一月三十日夜、路郎師を迎へて同所内で開かれた。

▲こがね吟社(岐阜)では十一月一日五十號記念大會を盛大に催された由。

▲白川の求眞會は、十一月十日に開催、○丸、雀郎、五花村、三太郎、太郎丸、盈光、蟻十の諸君から寄書を頂く。

▲京濱川柳吟社聯盟結成記念句會席上から諸君の寄書を頂く。

「太陽」「白髮」「記念大懇親宴」午後五時、會場未定會費參圓、出席者同志の餘興、(第二日)十一日「大阪市内觀光」集合午前十時大阪驛東口、會費二圓。「全國川柳家座談會」於心齋橋をぐらやビル心交社、午後六時半會費五十錢。

▲川柳雜誌社今治支部では、三周年を迎へ、十一月十八日松山の靈子君が參加して記念句會を開催、尙、宵明、靈子、柳石、文庫、向上庵、香方、仙海、曉童、虻の鷹、河鹿、心府、一穗の諸君から寄書を頂く。

柳誌要目 (十一月號)

ケイ評釋(後編二〇)
綿谷摩耶火(ふあうすと)

おもしろい句
川上三太郎(川柳研究)

公娼と私娼(德川時代から昭和の警察)　植木鬼佛(川柳研究)

柳樽を型態づける基本的用語の文法的解說(四)
木村半文錢(むさしの)

川柳レアリズムの防衛(進歩的作家の立場より)
鶴彬(芥子粒)

川柳への發展(四)
石崎柳石(川柳みすか)

覺十窟談義
蛭子省二(湯の村)

何を追求する(古川柳評論の十一)　堀口塊人(昭和川柳)

表現と鬪爭と思想
川上日車(氷原)

川柳が詩としての型態(二)

▲十一月十四日夕、川柳雜誌社神戸支部並兵庫支部主催で「神戸の會」が楠町事務所の樓上で開かれたが、路郎師を久しぶりで迎へ加ふるに大阪からは雞牛子、溪花坊、艸樂、機見女、西は明石、姫路の眞摯な柳人の參加あり、作句后、路郎師の講演「川柳山脈を讀む」の熱譚は、柳界に骨を埋める覺悟の奔りで中繼放送の設備なき憾みを感じた。

▲故矢野錦渓君（谷孫六）の追悼句會が舊高輪倶樂部の主催で十二月六日午後五時から朝日倶樂部に於て開催される由。

▲十一月七二日夜川柳雜誌梅田支部では翠陽君居で觀菊句會を開催、丹精をこらした數々の菊の中で記念撮影後作句、本社から出席された路郎師の講演あり小宴に移る。幹事鮎美君をもつ同支部の人々の暖かい集ひは誠に美しいものであつた。短册揮毫をされる師の筆にも、取卷く柳人の肩にも菊の香が馥郁としてゐた。

吟社の創立

▲本田溪花坊君を繞る大大阪研究會と「三味線草」を發行してゐる森雞牛子君の大阪媛柳川柳會が合體して大大阪川柳社を樹立柳誌「三味線草」の十一月號は活字使用で、從來の謄寫版刷りを一新された。

創刊と廢刊

▲松本文太君はじめ二十人の同人によつて、石川縣に平島川柳社が生まれた。十二月中旬その創刊號を發行されるとの事、御發展を祈る。

▲苔樹莊玉吉、蒼樹莊一吉、青樹莊九史（東京）の諸君の手で川柳「樹」第一號が發刊された。

▲尼綠之助君は川柳雜誌社籤川支部創立十周年記念號として「川柳籤川」を發刊された。

消息

▲安川久流美君（川・協名譽會員）は十一月二十七日九州方面に旅行され、列車の中から日本柳壇百人撰の句を、寄せられ、夜の大阪は見て素通りの忙しさ歸途も乘換へる位になるでせうとのお葉書に接した。

▲戸倉普天君（兵庫）は病氣靜養のため紀巡椿温泉に轉地されてゐるが、おそくても來春には歸られるだらうとの事、一日も早やく御快方を祈つてゐる。

▲本田溪花坊君（川・協名譽會員）は來山菩提寺、今宮の海泉寺で來山の二百二十年忌へ俳席「來山點前句附」について講演された由。

▲住田亂耽君（兵庫）は十一月二十六日夜久方振りの本社訪問折よく艸樂君も來社してゐた事さて路郎師と機見女と四人で道頓堀へ出かけ柳談に花を咲かした。

悠ち大舞臺に登場す（時評）　南部菊太郎（氷原）
品川陣居（川柳きやり）
初代川柳忌隨感—百四十七回忌に際し—　森鶏牛子（番傘）
自由律川柳の價値方向　石上稔（視野）
手近にあるもの　川上日車（視野）
鑑賞十句（柳樽初篇から）　櫻井六葉（梅鉢）
あきらめの句　安川久流美（梅鉢）
柳多留四編輪講（二一）　諸家（三味線草）
日本史傳川柳狂句（五）　故岡田三面子（三味線草）
今日の自由律川柳と明日の自由律川柳　木村半文錢（松囃子）
この二つのもの　松丘町二（川柳風呂）
「川柳職業人宣言」を讀んで
—麻生路郎への公開狀—　森田一二（蒼空）

▲美鴨美笑君（鳥取）は十一月三日伯耆大山に登られた由。

▲前田五健君（松山）は十一月十日小豆島に遊び、「一鳥も啼かず紅葉燃えさかる」の句をよせられた。

▲朝田新水君（大阪）は蒐集趣味家として知られてゐるが、個人展なら何時でも出來る程だ由又川柳の初心者を指導するなど活躍をつゞけてゐられる。

▲西村明珠君（神戸）は十一月十五日會社の人々と寶塚、清荒神、中山寺方面へ廻遊された由

▲橋本綠雨君は十一月四日橿原神宮から多武峰の秋色を賞で、同八日三朝温泉へ、九日は大山へ行くとの繪葉書だよりを頂く

▲鈴木一潮君（滋賀）は十一月廿四日武田尾に遊ばれ、紅葉と流れを樂しまれた由。

▲富士野鞍馬君（東京）は北國永平寺、山中温泉、東尋坊、字奈月温泉から越後長岡へ廻られ「狼の來る話も爨者言ひそへる」の句を寄せられた。

▲福士靜葉君（函館）は「川柳隊」の同人となられた由。

▲高原黑源太君（朝鮮）はバカチ吟社で活躍されてゐるが、かつて川・雜糸屋支部の會へ一年位出席された由。尙同社では、石燈籠君、東狂子君、松女君等熱心な作家が揃つてゐるバカチとは東瓜のやうなもので、これを半分に切つて水汲み等に使用する由。

▲伊藤千龍君（小樽）は以前からの川雜愛讀者であるが、創刊以來始めての投吟をされる喜びを手紙で寄せられた。

觀菊句會　寫眞說明（前列）鮎美、機女見、路師郎、斗風、布由、
（後列）朔風、大嶽、居卜、波靜、遊步、翠陽

川・柳・書・架（六二）

大樂八樓集

大樂八郎著

▼本書は大樂八樓君の遺句集で嚴父大樂桃白氏の序文に依ると

（前略）八樓の死を生かす爲にも、私はこれ迄の私といふものを、清算して、これから親としての役目を果したいと思ふ。今はその決心であるか、月日と共にどんな氣持にならぬとは言へぬ。夫れで今の氣持を持ちつゞける爲に、あれが遺して置いた、ノートの中から拔き書して此の小冊子を作つたのである。

支へ竹折れて黃菊のうなたるゝ

昭和十一年秋　大樂桃白

とある。

▲十一月十七日佐藤素涙人君（岡山）が突然本社を訪はれて折よく在社の路郎社主と初對面。同君はかつて明大に於て故岡田三面子博士に刑法を學ばれた由川・協に入會後、同夜岡山に歸られた。

▲橋本綠雨君（大阪）は十一月二十三日中央電氣倶樂部に於て社團法人電氣協會から廿五年勤續表彰をされた由。

▲西村山月君（大阪）は省線茨木春日丘に住宅新築中の由。

▲森田輝翠君（大阪）は大阪市の書記に任命された由。お喜び申上げる。

▲西田艸樂君（大阪）は十一月廿日所用の一二を了えて洛東、東山を山科に降り六地藏間のバスから逝く洛外の秋を滿喫された由。

▲岡田進示朗君（京都）は柳誌「むさしの」の同人になられた由

▲「大名古屋川柳社」では、伊志田孝三郎、港刀庵兩君が賛助員として迎へられた由。

▲宮武外骨翁四日放送のため來阪、三四日滯在されるとの事。

▲松田多郎君（大阪）は十一月十六日寒霞溪に遊ばれ秋を滿喫された由。

慶　弔

▲鳥居柳笑君（大阪）は十一月十六日、長女をもうけられた由

▲柳誌「視野」が發行されてゐた松枝規堂君は十一月八日急性肺炎で逝去された。行年二十六

▲村瀨無折君（京都）は旅行中急性腹膜炎に罹り鄉里岐阜宅にて養生されてゐたが十一月十二日逝去。謹んでお悔み申上げる

▲塩路吉丁君の嚴父は十一月十五日逝去された。

▲本社贊助員、川柳人協會名譽會員岡田法學博士（三面子）は十一月十三日逝去された。謹しんで哀悼の意を表する。

▲「財の敎」の矢野錦浪（正世）氏は、十一月十七日逝去された。謹しんでお悔み申上げる。

改　號

▲黑本都子君は十七夜月▲奥崎喜一郎君は夜雨郎▲河村洛天君は我亭▲大和田瓢吉君は柳童▲大坂正一君は形水

轉　居

▲淵田忠良君（東京市豊島區雜司ケ谷町一丁目三〇五）▲松井織惠君（京都市下京區朱雀北ノ口町三ノ一）▲視野發行所（神戸市灘區備後町五丁目一五觀田鶴太郎方）▲山田南鴻路君（尼崎市難波中通三ノ五二）▲朝田新水君（改稱の結果、大阪市外三鄉町西橋波五六九）▲永先芽十君（大阪市旭區生江町五五五）▲北條雲泥君（神戸市林田區眞野町一八四）▲河本朝村君（三菱造船所造船設計課）

▼内容概目、隨筆、日記、川柳▼昭和十一年十一月二十二日發行。四六假綴、九五頁。

川柳指導講座

講師　塚越　正光氏

課題「人相」一人一句

締切　十二月末日

投句　本社宛「川柳指導講座句稿」と明記する事

著作者大樂八郎。編輯兼發行人山口縣熊毛郡室積町大字室積村大樂宇一郎。發行所、山口縣熊毛郡室積町新市大樂桃白

前號正誤

（九頁）遊廓の入口で床屋灯の青く　福田山雨樓

（同）濱說は稽古の過ぎた聲を出し　畑田よしえ

（十三頁）愛妻の機嫌よい朝靴光る　春元紀太

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

川柳雑誌社 神戸の會（神戸）

主催 神戸、兵庫支部
十一月十四日夕 於楠町事務所

三崎陽幸報

手 初冬 火 集る 祈る 戀人
叱られる

ちようだいの手 尋常に揃へさせ 圓車
手をあげてすーイと呼べば手で應へ 呑行
病み上り疲れ戀女房の 手の白さ 砂丘
大佛の手に 立つて 時の人小さし 春秋
手相見は ダイヤの光りも 拜見し 艸樂
左手に 火鉢右 手に 菓子を 喰ひ 圓車
國を 出て 三年目の 手を 見つめ 明珠
アンコールさて吾が藝術おいでたナ 鷄花坊
手口から 見てと 專門的 に 出る 吉左右
紙芝居見て 居る方も 手がかじけ 勝太郎
父に似る手付きに母のうれしい目 陽幸
名人の兩手は チャンと 膝にあり 春秋
手が二本働く 口が 未だ 出來ず 某人
手が冷へて 來て旅の 酒苦うなり 勝太郎
朝霧の 中へ 初冬の 手を こすり 華水
ショウノウの匂ひが解けず冬の朝 陽幸
初冬に買はねばならぬものばかり 勝太郎
初冬の 夜熟怖冷たく 齒にしみる 呑行
貧乏へもう 追ひかけて 冬が來た 尖里
柿の 枝淋しくなつて 冬になり 春秋
初冬へ 身がまへも よし蘇鐵の樹 圓車
初冬へク、ク、クと 鷄歩き 春秋
初冬の 港へ 重油 流れて來 喜山
すき鍋をおろして夫婦火にあたり 勝太郎
神主と鷄居るだけの 落葉の 火 某人
火が出來た 老人 夫婦仲が 良し 明珠
火の樣な顔がかぶさつて來るキツス 春秋
切炭の 赤さ 島田が 重いなり 某人
聯珠屋の 人を集める 喧嘩もし 春秋
リウクサツク 集る處に 一人降り 潔
親類を みんな 集めた 床の 軸 某人
みんな來る 管の 茶碗を 積み上げる 某人
菊の 花 前に 祈りの 手が 揃ひ 華水
成功を 祈る 握手へドラが 鳴り 春秋
祈る 身の 社頭の 朝の 霜に 立ち 尖里
祈る 膝マリヤの 像へ 陽の 斜め 木履
神樣を 祈る 姿を あなどられ 勝太郎
必勝を 祈る 鳥居に 鳩が 來る 陽幸
十八の 姿の まゝで 逢つたきり 尖里
戀人を 妹だけが 知つており 喜山
戀人にかざす 帽子の 明日も晴れ 大履
戀人に 手紙 上手になつて來る 明珠
戀人があつて 一輪 挿しのはな 春秋
思春期 の 又 口笛を 叱られる 某人
泥あそびして 兄だけが 叱られる 呑行
父の氣性 知つて 歌つて叱られる 同
十八九 叱られる 氣の 戀をする 徒歩
叱られるからと別れたランドセル 華水

阪大川柳會十月例會（大阪）

十月二十六日 於惠濟會館三階

丸島利生報

思ひ付 柄 雑吟
思ひ付 ばよいが愚人もついて來す 方正
思ひ付 さと 解くあしらはれ 貞三

新世帶 思ひつくまゝ買ひ集め 君女
母親を顔まけさした思ひつき 利生
帶の片 ハンドバッグを思ひ付 淺女
思ひ付と云ふ 手料理の味のよさ 君女
謀事 家老はポンと膝を打ち 青一路
あれこれと思ひついては損ばかり 君女
記念祭 人目を引いた思ひ付 柳秀
思ひ付ましたかさは腹黑し 栗
氣紛れな 思ひ付下 役困らされ 利生
思ひ付いた體で 話は切り出され 千秋
才子肌 思ひ付いては職を替へ 芳一
湯上りの 柄で見分ける温泉場 正甫
お人柄と云はれ資產は減るばかり 芳一
兒を抱いて 娘時代の柄が行き 方正
家柄をかくす 女の酌を受け たけを
手内職我が娘に欲しい柄も縫ひ 柳秀
人形の着てゐる柄は似合ひさう 君女
柄にない智慧を不良は持ち合はせ 千秋
柄にない野望と知つた四十過ぎ 柳秀
結局は寳子の選つた柄に決め 君女
借金はもう家柄も考へず たけを
縞柄も見覺えのある形見分け 千秋
特價品柄のよしあし云へぬなり 利生
日柄見て來れば手後れだと言はれ 芳一
おちぶれてゐても家柄だけは云ひ 淺女
とうさんの派手な場末の女給に見 方正
大柄をまだ拔け切らぬマダムなり 青一路
家柄に生れ時勢に死を選び 千秋
女房又同ンなじ柄をひきだして 栗
人柄がよ過ぎて時の間に合はず 芳一

柄の提灯のと伯父が龍り出で 栗
こんな柄もあるのかと云ふ夜具を掛け方正
落ぶれて茶笠に見せるお人柄 利生
着る柄にあの娘この娘の好みあり 柳秀
妹にゆづるに惜しい柄であり 栗
柄のわるいことを言ふなときめつける路生
同じ柄で同性愛は寄りそへり 同
三十で蒲團のやうな柄を着る 正甫
胃を病んで酒も飲まずにうたはされ 利生
熔岩のやうな頭がバーでもて 柳秀
颱風の豫報は二號邸で聞き たけを
コスモスの咲いたを娘淋しがり 千秋
女もう自前のタバコ吸ふてゐる 路生
誓文へ妻の臍繰り間に合はず たけを
許された仲を羨む嫁きをくれ 柳秀
わかつたと多くを云はぬ賴母しさ 利生

川柳雜誌社 天王寺句會（大阪）

十月二十四日 於葉光居 須崎 豆秋報

案山子 鋏 銅貨 膏藥
弱味 繪具

爪剪つて貰ふ鋏は鈴の音 葉光
膏藥は孫が小さい手でめくり 同
すれてゐる妓弱味を知りつくし 同
御隱居へ鋏の切れて春日和 銀濤
驛音へ遠く案山子の立つ峠 同
バット買ふにさへも銅貨はひけ目なり 德三
頭痛膏十七八を不良寢する 同
つけ込まれまいと弱味の猪口をさし 同

銘を見て研屋鋏の性を賞め 彩泡
麗人の力が足らぬ花鋏 同
膏藥の効き目を過信してる母 同
本宅へ言ふなと社長目で知らし 同
繪具皿好きな色から減つてゆき 同
豊作に案山子うれしく取りのける 同
夕刊の釣は銅貨でよんでくれ 豆秋
繪具皿陣子一ぱい陽があたり 同
首の無い案山子となつて稻が熟れ 同
女房へ返す鋏に音があり 蝶の助
あんまりな銅貨と思ふ燒芋屋 同
膏藥を敷布へつけて朝となり 同
カンバスの繪具け踏まれそうに置く 同
こけそうな案山子鳴子に支へられ 同
忘れてた銅貨一枚出た秋 其奥
赤繪具だけが無くなる女の兒 同

尼崎句會（尼崎）

九月二十九日 於住友伸銅工業所 橋本路風報

旅裝 夜更

旅袋する心に邪心はなかつたか 南濃路
旅裝の身へ健康第一と手を握る 峰月
旅裝今のどが涸いた田舍道 艸樂
この邊でこの人に會ひ夜更知る 南濃路
消防車みんなおこして過ぎて行き 路風
夜の辻犬と人間びつくりし 艸樂

川柳雜誌社 梅田句會（大阪）

九月三十日夜 於靜波居 松枝靜波報

防空 變り者 名月

煙草の火空を護つてすひつける　鮎美
燈火管制闇となる歡樂境　大嶽
灯を消せば又防空かと子に聞はれ　冬扇
空襲の闇にポッカリ煙草の火　斗風
唇紅をつけて防毒面をつけ　卜居
防空の闇にハンマー強く冴ゑ　秀峰
防空へ軍服を出す久しぶり　靜波
防空の闇父と子は防護團　鮎美
防護團疲れた呼吸に白みかけ　朔風
變り者今日は袴をはいて來る　靜波
へんこつの親爺の店がよく流行り　由布
變り者齒ぐきを見せて笑ふなり　靜波
握手してひとりさびしく笑ふてゐる　鮎美
人生を馬鹿にしきつて生きてゐる　由布
虛無に哲す男に秋のちぎれ雲　朔風
髭のばす味覺の秋のひとり旅　朔風
さかづきに月を落してよもすがら　朔風
名月に女中はそつと帶をとき　斗風
名月の湖畔にとめるバッカード　朔風
名月にちと傷心を忘れてゐる　正風
名月を見れば淋しい一人旅　秀峰
名月の椽に親子の語りつゝ　美津生
名月へ煙ふんわり流れて來　卜居
名月へ母の思ひと子の思ひ　朔風
電燈は消し名月へ靑くゐる　正風
名月を唯だ名月と見た世俗　斗風
名月の海へこぎ出る舟一つ　朔風
名月の曠野へ光る鐵かぶと　翠陽
名月に僞り多き影の線　朔風
名月へ手を差しあげた萩の庭　同
居殘の窓へ名月おりてゐる　遊步
名月へ獨學の夜のペンの音　朔風
名月に冷たい茅の味を知る　由布
作業衣のまゝ名月を酒にして　同
名月へ一句を詠まんとして默り　鮎美

吟行（表六甲ハイキング）

十月四日　水谷鮎美報

草の露ひかる步調をあはせたり　綠吟洞
渡り鳥秋をまつしぐらにゆけり　同
秋の水ながれて水筒をみたしたり　鮎美
ケーブルに秋はだん〳〵高く見ゆ　同

川柳雜誌社 簸川十周年記念大會（島根）

十月十七日　於片岡旅館

尼綠之助報

記念

募集吟「步」　福田山雨樓氏選

子が步く眞赤な足袋に冬が來る　清根
茶桂を信じた朝の步の輕さ　みちる
町近く軍歌にやつと揃ふ足　眞太郎
太陽と步く遍路に秋白し　紅子
不平なく步む屋臺に露がおり　大期

同「戰」　米村あん馬氏選

酒ちびり〳〵作戰を固めたり　眞太郎
應援も復讐戰の聲になり　可香
誘惑に戰ひ疲れた夜のうつろ　綠窓
戰ひ抜いた老人の尊き皺よ　茂都子
戰の後は靜かな月が冴え　亮
戰衛へ女の眉の太き秋　好郎
戰ひ終りて明るき秋のみのり　傳重
戰勝の歸りみんなで灯に醉へり　さわだ
花芒風と戰ふ月になり　あん馬

兼題「祝」　生田翠夢氏選

さて〳〵祝ふ心の落ち着かず　華村
お祝に女ばかりのひるの飯　羅門
祝勝の返電補欠が走らされ　山川兒
うらぶれた叔父眞心で祝に來　京斗
祝電の中に小さな見榮もあり　同
祝電のもう一つ來るあてがあり　山川兒
祝辭受く主催者の瞳に光るもの　草路
世を退いて子に祝はれる年齡になり　輝年彌
內祝母久方の猫口をもち　翠夢

米　尾添雷相氏選

留守番の米の足りない音でとげ　壽木女
米の値も知らず社長といふ名前　美笑
紺飛白米の値段など知らず　山川兒
秋陽さら〳〵お米がみのります　大期
米拾ふ雀に怖い音ばかり　輝年彌
人一升の米に夜風の寒いなり　章泉
從順に生きるお米の値に追はれ　大期
積込んだ米に景氣が出そうなり　京斗

鉢卷　三鴨美笑氏選

男の歡喜鉢巻で汗を拭く　綠之助
鉢巻の力米俵を持ち上げる　茂都子
鉢巻で男としての意地もあり　笑期
雄々しさよ其の鉢巻に光りあり　雨舟
鉢巻をして恙なく今日も暮れ　月兎
鉢巻に汗の匂ひのする秋ぞ　羅門
反抗のある日の鉢巻ねぢり込み　大期
鉢巻の威勢儲けを見破られ　笑鬼

勝谷山川兒氏選

石

亡き母の墓石へ強く陽のすべる　田鶴緒
捨て石となる氣の母のよく動き　翠夢
動かない庭石且那も手を添へる　月鬼
石段を數へ〳〵てふと忘れ　さわだ
石蹴つてけつて心は眞黑だ　笑鬼
溪流の底になつかしそうな石　京斗

尾添好郎選

遠慮

先生と同席遠慮な腰をかけ　茂都子
遠慮する家かと伯母に叱られる　草路
遠慮する子へ繼母の瞳のうるみ　同
遠慮深い人の足許みじめなり　京斗
遠慮ばかり息づまる女連れ　綠之助

金岡草路選

白いもの

久しぶり母の小びんに白いもの　さわだ
在りし日の彼女しのべる壁の文字　朴泉
白いものばかり病院の黃昏れる　華村
白いものつけてやつぱり女の子　雨舟
子に丁度數へられる程帆前船　雷相
白紙にはかへり切れない戀を持ち　壽木女
白く塗る壁へ隱居の意地を張り　草路
白きベットに母は小さく息をつぎ　大期
白靴で月俸二十圓にて候　山川兒
波頭嬉しい足へ寄せて來る　京斗
夜を稼ぐ女か白き鼻筋よ　綠之助
ひるの月しろき一枚の秋である　羅門
天幕村あぶなげな飯ふき上げる　雷相

川柳雜誌社　**松山句會**（松山）

九月十日　於晴朗食堂　酒井大樓報

繪本　好き嫌ひ

枕蚊帳繪本が少しはみ出され　かき松
幼子の未知の世界を知る繪本　大樓
繪本買ふ約束藥のまされる　靈子
稻光り繪本をほつて蚊帳へ入り　何毛子
昔々と繪本の譯へ嘘をつき　五健
日曜日繪本の假名を讀される　耕一路
繪本など有つて小兒科控室　同
繪本など見せ退院の日も近し　靈子
質問の續く繪本へ母忙し　晴朗
廻らない舌で繪本を逆に讀み　浩笑子
なぐさめてやるに繪本へ目もうるみ　素泉
服を着た象の繪幼な心吸ひ　五健
伯母さんが繪本をくれて好になり　かき松
水枕あれやこれやと好き嫌ひ　同
零落の只好き嫌ひだけ殘り　何毛子
ネクタイの柄も女房の好き嫌ひ　素泉
當連の嗜好へ如才ない仲居　大樓
極く好きと極く嫌ひとをトマト知る　耕一路
日々の妻の苦勞に好き嫌ひ　靈子
先生に好き嫌ひあり女學生　五健
おでん屋へ四五人集つた好き嫌ひ　素泉
潔癖の評あり多い好き嫌ひ　大樓
驛辨へ好きの嫌ひの云ふとれず　同
好き嫌ひ言はず自然の兒は肥る　何毛子
好き嫌ひなくてよく寢る二十貫　五健
好き嫌ひ顏にも見せず流行妓　晴朗

川柳雜誌社　**鶴町句會**（大阪）

十月九日　於加藤ライト居　宮岡白峰報

泥棒　寒い　無茶苦茶　底

氣安さ　貸切車　無分別

泥棒に身の上話聞く度胸　秋月
泥棒の眞似して留守を恐がらせ　同
小商無茶苦茶ですとまけてゐる　秋月
氣安さへぐち續くなり續くなり　岩石
氣安さについうか〳〵と來てとまり　濠公
キャラメルの紙一杯に貸切車　寬柳
貸切車自轉車ぬいた時の聲　ライト
先生もネクタイ取つた貸切車　岩石
醉ふた子をいたはつてゐる貸切車　寬柳

貸切車母の病を思ひだし　岩石
無分別妻あり子まであるのなり　同
無分別不孝者とは知つてゐる　ライト
無分別女の親ば泣いて止め　榮
無分別老父の前に泣き伏して　秋月
無分別もう三等の客になり　變人
無分別二人の親の膝が合ひ　變人
樽の底いくつも抜けた阿波踊　榮
底力妻に見せたい事があり　岩石
心底はこうであつたと酔ふてゐる　寛柳
どん底のくらしへ子供又産れ　ライト
恐ろしい底とも知らず泳いでゐる　よしみ
もう底の見えた德利を淋しがり　變人

川柳雜誌社　**松江句會**（島根）

十月八日　於なにわ旅館　勝谷山川兒報

祭窓山喧嘩隣巣　緣之助
ひらがな
祭の灯幼き頃をなつかしむ　緣之助
ネオン霧にぼやけ故郷は秋祭　笑鬼
増税の噂で祭客は酔ひ　天痴人
お祭りの太鼓を遠く聞いて戀　都之介
本腰のそれから窓はみんな締め　笑鬼
カインクをこぼす小窓が開けてある　都之介
情痴の窓へ朝霧が深かつた　同
喧嘩して戻つて飯をよくこぼし　都之介
手を拭いてお隣までの襷がけ　緣之助
お隣りの干物竿の端を借り　都之介
隣の家の甘柿へ夕日うまそな　天痴人
隣同志官舍は意地に暮れるとこ　山川兒
人間の生活を笑ひ風の巣　緣之助
巣へ歸る鳥のラッシュアワー　天痴人
増築の噂の中に燕の巣　山川兒
ひらがなばかりで戀愛も半ばすぎ　緣之助

尼崎句會（尼崎）

十月二十七日　於住友伸銅工業所　橋本路風報

疊ズボン　壺　空巣
疊變へ一疊敷でめしを喰ひ　一雄
青疊眠くも無いに畳寝をし　軍市
意見よりサラのズボンに氣をさられ　素硯
唯一の證據となつた此のズボン　直能
兄弟が仲間ではけるズボンなり　四一
律義者ズボンの折目氣に止めず　素峰
ズボン吊外して本格的に飲み　同
二階借ズボン吊した下で寝る　遠見路
明日といふ暮しズボンにおしたする　美知夫
男裝の曲線豊なるズボン　南濃路
停年のズボンは色の褪せたまゝ　同
俄雨ズボン勞る小市民　麻斗
流行に追越されたるズボンはく　ゆづる
校長のズボン古いが折目あり　路風
つぎ當てゝズボン働く姿なり　素朴
白ズボンジャンプの樣にバスをよけ　美知夫
ズボン敷いて明日の仕事を考へる　素峯
インク壺たまたま出せば悔み狀　同
蛸壺もしばし蛸にはよい住家　美知夫
壺を飾つて貧乏人を寄せつけず　遠見路
留守などと見せぬ積りの錠が出來　同
空巣のまゝ時報知らしてる　素朴
午後の陽を浴びて空巣の前の犬　素峰
ひるとんび子供の多い家と知る　美知夫

川柳雜誌社兵庫支部　**岬柳社句會**（兵庫）

十月二十二日　於三崎陽幸居　奈落報

式　虫　値上げ　元氣　洗面器
内輪事秘めて結婚式もすみ　キヨシ
高砂や聲たからかに固め込み　一服
入學の式へうれしいランドセル　陽幸
式辭よむ村長の顔固すぎて　徒歩
觀艦式大阪灣を狹くする　一服
入場式ブラスバンドが陽に光り　同
校庭に今日の佳き日を雲が溶け　同
カルガンへ菊花豊に明治節　同
コホロギの死骸寂しきものにふれ　雲泥

腹の虫に殉じて街に落ちぶれる　某人
値を上げて見て骨董屋置きかへる　徒歩
物價騰貴商店街は旗に風　靜水
金値上げ母の入齒も見合され　キヨシ
ニコ〳〵と女工値上げの絹を織り　奈落
暴騰の株持つて居るい〻夜食　某人
子の茶碗米の値上げへまん丸し　同
年寄の元氣へ菊がシヤンと咲き　同
子の元氣目方を父へ云ひに來る　同
アルバムへ元氣であつた子の笑顔　靜水
酒の元氣南京豆の皮が散り　某人
日曜をゆつくり使ふ洗面器　靜水
サイレンへ使ふひまなし洗面器　徒歩
洗面器今日の務へ元氣づけ　靜水
洗面器落して髭に睨まれる　一服
深酒のゆふべを悔ひる洗面器　某人
石鹸が當つて飛んだ洗面器　同
子の釣つた鮒でふさがる洗面器　同

川柳雜誌社 畔柳社句會（大阪）

十月二十一日　於大鐵クラブ　山本喜山報

寢冷え　相棒　影法師　その後

鍋

寢冷の子夫婦喧嘩の朝にさせ　秋生
寢冷して體温計を借つて來る　陽幸
約束の朝を寢冷えの氣味で出る　水客
寢冷えした小僧へ出前ばかり來る　某人
寢冷えの子布團の中へ猫を入れ　水客
寢冷えした父の髞と子の髞　鮎美
相棒の瞳が笑ふ給料日　秋生
相棒の一人轉向する氣なり　紫香
言ひ譯へ相棒の名がひよつこり出　喜山
相棒の腰の低さをふと感じ　陽幸
相棒と併せて拂ふ屋臺鮨　某人
相棒は肥えてる俺は痩せてゐる　鮎美
相棒は太り過ぎてる二人席　秀太
影法師塀の破れへ倒れ込み　某人
背伸びしてそれ切り消えた影法師　同
影法師ぢつと見つめる病上り　秋水
吾が影にふと幸福を見付たり　喜山
先生の影が映つて靜かなり　萬的
影法師ラヂオに合す手の長さ　陽幸
影法師ふとおでん屋へ消えてゆき　紫香
少女らの頰ほてりたる影法師　鮎美
食卓へその後の話續くなり　一蜂
其の後の消息絶えて蹴ぎ出し　紫香
その後もやつぱり酒に生きてゐる　一生
無茶酒のその次逢へば悟り切り　某人
秋の雲遠くその後の君を僕　鮎美
禁治産平穩無事に梅が咲き　水客
古道具屋穴ある鍋も並べとき　一生
鳥鍋へ清い二人がふと淋し　一蜂
待たされた子供へ鍋へほろ機嫌　木履
銀の鍋旦那でつぶりしてるなり　某人
割鍋の響も輕く秋の風　敏郎
どん底の蓋の合はない鍋で炊き　某人
魚ざろりとろりと鍋に煮つめられ　鮎美
辨慶の鍋かけてゐる大伽藍　秀太

川柳雜誌社 松山句會（松山）

九月十七日　於耕一路居　酒井大樓報

偽物　防空演習　雜感

偽紙幣へ九圓五十錢をしてやられ　大觀
偽物であらうと好きな好きな景　漫歩
偽物も摑み娘も獻上し　五健
偽物を抱へて今日も草臥れる　大觀
偽物は承知其繪が好きで掛け　耕一路
偽物の方が時代にふさはしい　靈于
偽物の孤兒とは知れど少し買ひ　雨眠
偽物と思ひたくない筆の跡　大樓
あり餘る金へ偽物押よせる　五健
つかんだからつかませる軸　克海
鑑定家偽作にしても立派です　同
偽物を羽織袴で賣りに來る　大樓
空襲へ此の一廓の三味太鼓　雨眠

火を消せと云ふ 自警團 氣が荒い 大樓 卜居
自警團 此の時なりと 叱り付け 五健 斗風
燈管の暗さの中で酒をつぎ 耕一路 朔風
管制は完全に出來家はから 克海 翠陽
班長の服で床屋は宵をとめ 雨眠 由布
飛行機だソレ空襲だ街は暗 靈子 遊歩
燈火管制無燈悠々通り過ぎ 大觀 朔風
防毒班 覆物の裝で煙を縫ひ 漫歩 斗風

逢いに行くトンビへ 菊の眞盛り 卜居
合トンビぶらりと寄席の客となり 斗風
父と子に行き先のある合トンビ 朔風
ネオン街ぬけて社長の合トンビ 翠陽
紅葉狩り下戸には寒い合トンビ 由布
合トンビない貧乏になれきつて 遊歩
丸髷の手に持たす氣の合トンビ 朔風
逢へた夜の霧がきれいな合トンビ 機見女
合トンビ妻のみやげと子の土産 遊歩
言葉なく握れば通ふ手のぬくみ 朔風
金ゆえの握手も淋し氷雨ふる 斗風
握手して君の覺悟を信じきり 靜波
おたがひの過去へ淋しく握手する 朔風
握手する二人へ紅葉まつ赤なり 翠陽
握手した朝がひかつた丘にたち 鮎美
薪の火に凡夫佛になるのなり 由布
肉を煮る炭火へ子等の顏が寄る 卜居
窓遠き山に雪ありペチカ燃ゆ 朔風
京都まで相手になつたタバコの火 靜波
燐寸すつて嫌なお客と思へども 遊歩
まごゝろの燃えつくまでの火がわびし 鮎美
吸殻の地を匍ふまでの火となりし 同
熔鑛爐の火を聯工等信じきり 斗風
かんかんと火が燃え娘ひとり待つ 路郎

川柳雜誌社
梅田支部 **觀菊句會** (兵庫)

十一月十二日 於增元翠陽居

水谷鮎美報

幹事 合トンビ 握手 火 遊歩
呑みなほす氣で居る幹事少しうけ 靜波
ぼろくそに云われて幹事は唯だ笑ひ 斗風
幹事さんWCはちらです 靜波
別室で幹事同志がどもめてゐる 同
胸算用出來て幹事は手をならし 靜風
無筆でも幹事をやつてのける歳 大嶽
幹事いま戀となりたる夜をゆく 鮎美
幹事して妻の苦舌を聞く夜ぞ 靜波
吸物も冷えて幹事は堂を据え 卜居
合トンビ妻に持たせていゝ天氣 由布

年賀はがき印刷

二番唐紙 畫仙紙 白フチ百枚 一圓

印刷締切日 十二月十五日
內地送料 十四錢

年末年始の御贈答には是非弊店の品を御採用願ひ上げます

年賀はがきの印刷は和正堂にたのめば氣の利いたものが出來ます。柳人のコツをよくのみこんでゐますから——

路郎生

色紙・短冊・書畫
表裝・風流・文具

大阪市南區心齋橋筋二丁目
大丸一丁南之辻東入

和正堂

電話南(75)二七一五番
振替 大阪九一七五番

外に年賀用葉書臺紙種々取揃へてあります

二階座敷

は極く靜かですから川柳家の皆様に忘年句會などの小集會場として好適だと存じますからせいぐ御利用下さいませ。

河豚だ
酒だ
男盛りの
うれしけれ
路郎

即席料理・ちり鍋

まん朝

大阪千日前芦邊劇場東裏
電話戎一五三一番

屏風
襖
表装
一式

表装の好期を失はぬやう！
御一報下されば直にお伺ひ致します

山守表具店

大阪市住吉區阿倍野筋三丁目七三
電話戎五四六〇番（呼）

洋酒
喫茶

キング喫茶室

大阪・市電玉出本通三電停直ぐ西入

お寫眞は!!
藝術的で
大衆向きで

きつと皆様の
お氣に召す……

工藤清寫眞館へ

朝日ビル一丁南・肥後橋
電 土 5 5 5 0 番

横縦編輯

▲十二月の聲がかゝると、實際からだも忙しくなるが頭は仕事以上に忙しくなる。殊に此の一ケ月のうちに十二月號と新春號とを出して春を少しくゆつくりしたいと思ふとボヤボヤしてゐられない。文字通りの大車輪だ。▲川・雜の名物になつてゐる忘年川柳大會がいよ／＼押し迫つて來た。極月の十三日の夜は何はさて置き出席して優勝盃を爭つて欲しい。（別稿廣告記事參照）▲前號で發表したやうに「武玉川二篇研究」が終稿となつたので、本號ではその研究の研究と云つた風のものと正誤を掲げることにした。竹重虚心君の「武玉川二篇追究」、綿谷摩耶火君の「武玉川研究落穗」森東魚君の「武玉川二篇正誤」がそれである。一々正誤の勞を執られた東魚君の忠實さには全く頭が下がる。こゝに特筆してお禮に代へる。▲毎號好評を博してゐる「日本名所名物川柳」は本號掲載の四國の卷で四國を打ち切ることにした。選句と麗筆によつて誌上に光彩を放たれた前田五健君の勞を多とし謹んでお禮申上げる。▲塚越正光君が編輯してゐられる「財の敎」の主宰、谷孫六（矢野錦浪）君が長逝されたので、身邊多忙を豫想してゐたが果して「川柳指導講座」の原稿を本號締切日までに受取ることが出來なかつた。同君は忙しい中にも責任を感じて机に向はれたさうであるが、頭の中が錦浪君のことで一ぱいになつてどうしても筆がすまず、投句された方々に不悪お宥しを願つて欲しいといふ通信に接した。私としては正光君の目下の立場に寧ろ同情してゐるので同君に代つてお詫び申上げる。▲北支張家口にゐる岩崎松代さん、病床にあつても「川柳雜誌」のことが忘れられない。着くが早いか手にして讀み耽けるところを、夫君岩崎柳路君がカメラにをさめて郵送してくれたのがこの寫眞である。ぢつと見てゐると、しみ〴〵としたものを感じる。▼十一月は柳界にとつて凶の月だつた。岡田博士が亡くなる。矢野錦浪君が亡くなる。九月に上京した時、岡田さんが入院してゐられることを知つたのは東京の川柳家でなくて僕だつた。その足で錦浪君を訪れて油斷のならぬ、健康狀態を見て歸つたのも僕だつた。その日私は實に暗い氣持になつてゐた。悪い豫感が怖れてゐたが、十一月になつて豫感は的中した。私の机上には更に神戸の規堂君、京都の無折君、大阪の吉丁君の嚴父の訃報があつた。私は黑枠の中にゐるやうな氣がした。▲吉丁君の嚴父の會葬で、阿倍野齋場へ行つた。久しぶりに食滿南北君に會つた。南北君は生きてゐるのが邪魔臭い、さりとて死ぬのも邪魔臭い心境にあると云つてゐた。一寸しなびていつもほど大兵肥滿の南北君に見へなかつた。矢張り健在であつて欲しいと思ふ。▼前號で年賀廣告のことをお願ひしたところ御同情下さつて早速ポケットマネーを投げ出し一ト口掲載、あとは編輯のたしにして吳れとおツしやる方もあつて、この分なら新年號の目鼻も立派につくと張合を生じてゐる。感謝と共に一層の御支援をお願ひする。未だ申込みにならない方々もどうぞ。

柳人年賀廣告

柳人に限つて特に低額の年賀廣告をお取扱ひ致します。御後援の意味で大至急御參加下さい。

▼廣告掲載料　一口　金一圓

幾口でも申込んで下さい、一口分原稿はなるべく簡單に願ひます。

申込期限　十二月十日（嚴守）
（新春特輯號に掲載）

川柳雜誌社
振替口座大阪七五〇五〇番

川柳人協會
振替口座大阪三一五一四番

▼一頁御希望の方は特に御相談申上げます
▼廣告申込は成るべく振替御利用の上前金でお願ひ致します（三錢以下の切手代用差支ありません）

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入・漫畫三十二葉
川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで嚙んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である。

定價壹圓　特價八拾六錢　送料壹錢

阪大川柳會編纂・路郎序

川柳句集　大川端

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。（四六版二〇〇頁）
本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。
殘本僅少至急申込みあれ！

頒價壹圓　送費六錢

橋本綠雨著
麻生路郎序

川柳句集　街の雜音

☆作家生活十三年、默々として吐き出した著者そのままの生きた姿、一讀再讀人生の底邊に觸るるものあらん。敢て薦む。

定價五〇錢　送料四錢

發行所　不朽洞

大阪市西成區玉出本通三丁目三六地
振替口座大阪三〇三九九七
電話天下二五九

社關係の人々（いろは順）

賛助員

池澤樂居　赤井清司　田村孝之介
長谷川一徹　淺田一　谷脇素文
大道弘雄　末弘巖太郎　生方敏郎
岡本一平　高尾亮雄
片岡直方　窪田銀波樓
笠原路生　安川久流美
嘉納純　沖野岩三郎　前田五健
田中辰二　大島濤明　食滿南北
長崎柳秀　大谷五花村　柴谷宰二郎
長岡半太郎　大西長三郎　篠原春雨
長野晴濱　小川武　蛭子省二
國枝史郎　龜井晟修　藤里好古
藤村作　川上三太郎　小林不浪人
藤本卯之助　川村花菱　森東魚
頴原退藏　米村あん馬

客員

伊藤彦造
鳥山一步
前田雀郎
京都支部（京都市）幹事　明石柳次郎
鳥取支部（鳥取市）幹事　中島鐵州
松山支部（松山市）幹事　酒井大樓
御旅支部（大阪市）幹事　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）幹事　須崎豆秋
鵜町支部（大阪市）幹事　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）幹事　西いわを
松江支部（松江市）幹事　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）幹事　山本喜山
西條支部（愛媛縣）幹事　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）幹事　竹内機見女
今里支部（大阪市）幹事　市嶌沒食子
上町支部（大阪市）幹事　廣原都會人
今治支部（今治市）幹事　月原菅明
光笑會（大阪市）幹事　永田里十九
伯耆支部（鳥取縣）幹事　三鴨美笑
竹原支部（廣島縣）幹事　松井可笑
十三支部（大阪市）幹事　淺野牧人
臺中支部（臺灣）幹事　宮内耕明
兵庫支部（神戸市）幹事　三崎陽幸
道頓堀支部（大阪市）幹事　庄萬よし
九三會支部（大阪市）幹事　北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事　喜多春秋
國館支部（國館市）幹事　龜井晟修
高知支部（高知市）幹事　國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事　水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事　衍流之介
田邊支部（和歌山）幹事　辻左馬
緑之助

川柳雜誌社
社主　麻生路郎

支部と幹事

川・雑・案・内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）
投稿、宛輔、句會案內、柳壇廣告、その他

1936年の合本（第十三卷）

を机上に備へて春を迎へませう。

頒價金參圓

送料　大阪市內一冊六錢
市外一冊廿四錢御註文は川柳雜誌社へ（前金）

投句用箋

川柳雜誌投句用箋の昭和十一年度新製が出來ました。投句には本社正規の此用箋を御使用下さい。

五十枚綴　二冊　金十二錢（送料共）

御申込は川柳雜誌社へ
＝切手代用も可＝

合本特賣

川柳雜誌の合本第二卷より第十卷まで
各一卷　金壹圓五十錢
第十一卷及十二卷　金參圓
送料大阪市內　一冊六錢
市外　一冊廿四錢
御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の殘本が僅かばかし出て來たのでお頒ちします。日車、半文錢、路郎の三氏の句しか載ってゐない桝形四頁もの全三部で十錢、二錢切五枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

路郎先生染筆

春掛用

掛軸、横額、小物、短冊等を川柳家に限り左記値段でお頒ち致します

軸箱入　二十圓・額　二十圓
小物　五圓・短冊　三圓

句はなるべくお任せ下さい

御申込は前金で發行所へ

殘本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます

第二卷より第三卷迄　十五錢
第四卷より第十一卷迄　一冊　十錢
第十二卷　一冊　二十錢
（送料一冊一錢）
御申込は前金で川柳雜誌社へ

懸賞川柳

課題「顏色」一月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌

川柳倶樂部

毎月一日發行
一部廿錢・送料一錢

東京市牛込區拂方町一四
川柳倶樂部社

川柳研究

（毎月一回發行）
一冊金廿錢
半年金一圓
一年金二圓

異色ある本誌の創作欄と初心者への入門欄をアナタは絶對に見逃してはいけません
見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ

東京市王子區上十條町八五〇
發行所　川柳研究社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢

東京豐島區高田本町二ノ一四六八

川柳きやり吟社

清酒
白鶴
ハクツル
元醸發
嘉納合名會社
大阪・東京・神戸・京城・仁川・大連・奉天

推奬　醫學博士　楢林
監査　醫學博士　片瀬

ワダカルシユーム錠

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる姙娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護奬養に任じ、惡阻期を安全に經過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますからお産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豐富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の惡化を防止し、乳兒も隨つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀬醫學博士述「安産のために」進呈

代時ムーユシルカ
てし設建を

茲に二十年、幾十萬の姙産婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀬博士の、二十年一日の如き熟意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシユーム錠」

大阪道修町　和田卯助商店

若返りに！ジンホルモン

・内服用・
・注射用・

呈贈献文

・標準的男性ホルモン劑・

本品は在來の臓器製劑等とは異り、世界最初の化學合成に依つて得たる純粹男性ホルモン結晶を主成分とし、注射液は每筒必ず一瓩（二〇鶏冠單位）內服用錠劑は每錠〇・一二瓩（二・四鶏冠單位）の純粹結晶を含有し力價恒に一定、奏効全く確實、副作用絶無なる標準男性ホルモン劑なり。

更年期障碍

頭痛・怠倦・精力減退・記憶力減退
視聽力減退・生殖腺の退化等

性的神經衰弱

物起力減退・早漏・性慾欠乏・性
感減退・性的神經衰弱及精神病

一般老衰現象

動脈硬化・血壓亢進・肥胖病其他

包裝

注射液	5管・10管
錠劑（內服用）	
三〇錠	三・八〇
一〇〇錠	一二・〇〇
二五〇錠	二七・〇〇

製造所　嘉寶化學研究所

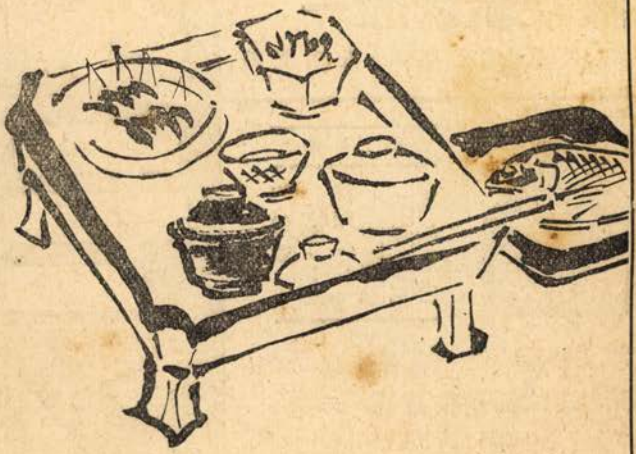
發賣元　嘉寶物産株式會社藥品部

本店　大阪市西區阿波堀通一丁目十番地
振替　大阪七五七二八番

支店　東京市京橋區銀座三丁目三番地
宗正菊ビル

良いお醤油は
結局經濟です

斷然日本一
マルキン醤油



投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十四卷第三號懸賞課題

一月五日締切

（十句以內）

窓口　森　雞牛子　選

女將　麻生　葭乃　選

第十四卷　第四號懸賞課題

二月五日締切

（十句以內）

落花　麻生路郎　選

惡戲　池田可宵　選

毎號募集

近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

懸賞句規定

▼天地人三位に粗品を呈す

▼一般無募歡迎

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○諸代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます。但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十一年十二月十日印刷　第十三卷　第十二號
昭和十一年十二月十五日發行　（毎月一回十五日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所　川柳雜誌社
電話天下茶屋二五七九番
振替　大阪七五〇五〇番

東京市蒲田町女塚町二〇三
川柳雜誌社東京支社

禁無斷轉載

賣捌書店

（大阪）大賣捌大賣書店　參文社　田文堂　其他　市內各書店
（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店　玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戶）米田、寶文館（函館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

お子様のお晴着

坊ちゃん
孃ちゃんの
洋裝・和裝
一切豐富に
取揃へてご
ざいます

南海 高島屋
大阪・なんば

營業時間
夜間九時迄
月曜休業